

老人ホーム建設に伴う

善根寺遺跡第1次発掘調査概要報告

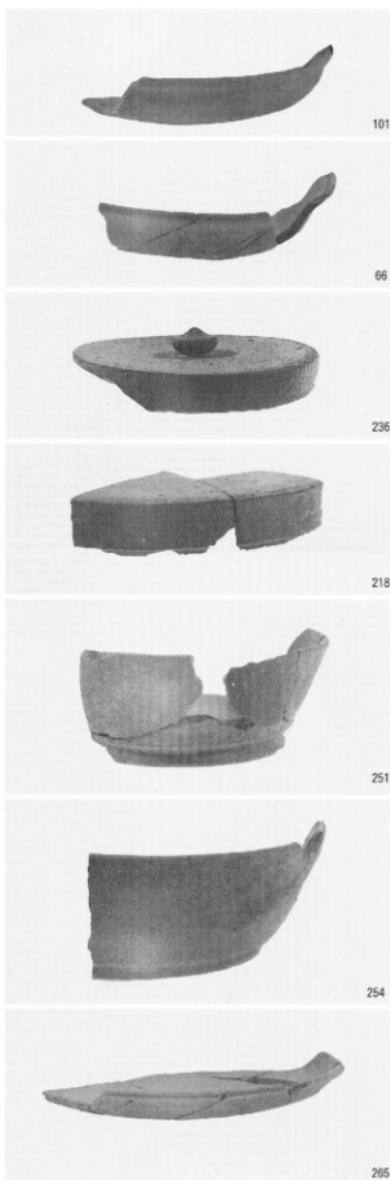
2003. 3

東大阪市教育委員会

正

## 正誤表

P47 図版11 遺物（右列）  
について、右の写真にご訂正  
下さいますようお願い致します。



## はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市の最北端に位置する善根寺町付近では、近年開発が相次いでおりますが、すぐ東に生駒の山並みに接し、緑豊かな自然に囲まれた地域となっています。

本書では、善根寺遺跡での最初の調査－第1次調査の概要を報告します。調査では、奈良時代中期から平安時代前期にかけての掘立柱建物が6棟検出され、古代の「日下郷」の中心地であることがわかりました。また出土遺物では、当時の土器類のほか、製塙土器などがまとまってみつかり、集落でのくらしぶりをほうふとさせています。詳細は本書に記すとおりです。

本市では、これら遺跡の調査成果をいち早く公表し、埋蔵文化財の保護・顕彰に努めてまいりたいと存じます。本書が埋蔵文化財調査の報告書としてだけではなく、広く善根寺町の歴史を振り起こす冊子として利用されることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきまますようお願い申し上げます。

平成15年3月

東大阪市教育委員会

# 目 次

## はしがき

### 目次・例言

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 遺跡	4
IV 遺構	7
V 遺物	13
VI 調査成果と課題	34

## 例 言

- 1 本書は、老人ホーム建設に伴う善根寺遺跡第1次発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査は、調査原因に係る個人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。実施に際しては、御大浜組・安西工業㈱が調査協力者となった。
- 3 現地調査は平成14年6月17日から8月31日まで、遺物整理は調査終了後から平成15年3月31日まで実施した。
- 4 現地調査ならびに遺物整理は、菅原章太(東大阪市教育委員会)が担当し、菅原礼子・千喜良淳(安西工業㈱)が補助した。本書の執筆・編集は菅原章太が行った。
- 5 現地調査の写真は菅原章太が撮影し、遺物写真は千喜良淳が行った。
- 6 遺構実測図の水準高はT.P.値を用いた。
- 7 基準杭・調査杭の打設は、安西工業㈱からの委託を受けて三木測量事務所が実施した。
- 8 現地の土色の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 9 考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。また平城宮跡出土土器の型式については、奈良文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告』に準拠した。ただし型式名は「平城宮土器Ⅲ」を「平城宮Ⅲ」と略記している。
- 10 現地調査では、遺構名称に略号を使用した。略号は以下のとおりである。

S P	ピット・桂穴	S D	溝・溝状遺構
S K	土坑・土壤墓	S X	その他落ち込み状遺構

- 11 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々や関係諸機関から多人なご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。

谷口 正明・谷口 明・株式会社大浜組・安西工業株式会社  
渡辺 晃宏・菱田 哲郎・大下 明・永田 景子

I はじめに

善根寺遺跡は、東大阪市善根寺町1丁目と池之端町の一部に所在する、弥生時代から中世期にかけての集落跡である。遺跡は昭和56年度の埋蔵文化財泡袋地図の改定時に、周知の遺跡として登録された。その折、本遺跡北東の山腹部に所在する坊主山遺跡(旧称・善根寺遺跡)を「善根寺山」遺跡と改称し、山麓扇状地上の本遺跡を「善根寺」遺跡と命名した。したがって『枚岡市史』などの文献で繩文時代中期土器の散布地として知られる遺跡は、現在では善根寺山遺跡に相当し、直接本遺跡と関連するものではない。注意を喚起しておきたい。

善根寺町一帯は、分譲住宅が広がり長閑な田園風景が見られる地域で、近年まで大規模な開発工事が行われたことはなかった。このため、遺跡の発見以来、本遺跡で発掘調査は実施されることはないかった。平成13年11月、善根寺町1丁目636-1番地ほか4筆において、個人から特別養護老人ホーム等施設(以下「老人ホーム」と呼称する)の建設のため、該地での埋蔵文化財の有無を確認する調査が依頼された。建設予定地は4枚の棚田を構成しており、うち北端の棚田は駐車場を予定とのことで確認調査の対象から除外し、3枚の棚田について東西のトレンチを7箇所設定し調査を実施した。この結果、東端と南端の棚田で弥生時代と奈良時代の遺物包含層、奈良時代の溝ないし土坑とみられる遺構を検出した。中央部の棚田では南端棚田の北から大きく傾斜する崖面を確認したのみで、時期不明の自然河川ないし埋没谷により該期の遺構面が消失していることがうかがわれた。翌12月には当地において「埋蔵文化財発掘の届出」が提出されたため、老人ホーム建物について発掘調査実施の協議に入った。確認調査の結果に基づき、届出者の協力を得て東端及び南端棚田を対象として発掘調査を実施することで双方合意した。

調査の実施については諸般の事情から東大阪市教育委員会の直営事業となつたため、現地調査の進行や引き続く遺物整理・報告書作成にあたり業務遂行に不安が生じた。そこで調査依頼者の側で東大阪市教育委員会への調査協力者を選定した。調査協力者には柳大浜組・安西工業㈱があたり、現地での調査掘削・構面調査のほか遺物整理・報告書作成の



第1図 調査地点位置図



第2図 現地説明会風景

実務を担当した。調査の諸業務は東大阪市教育委員会が調査協力者を指導した。現地の調査は平成14年6月17日から8月31日まで行った。この間、奈良～平安時代の掘立柱建物が発見され、その規模を把握するため、事業主のご協力をいただき2回にわたりて調査範囲を拡大した。また8月10日には今回の調査成果を市民に公開する現地説明会を開催した。酷暑の中、約200名の参加があった。

## II 位置と環境

生駒山地の西麓部では、642mの生駒山頂頂から北へ緩く標高を減じている。山頂を縦断する信貴生駒スカイラインで、本遺跡の東方を見ると約360mとなっている。善根寺遺跡は前記の山地斜面を流下する小河川が形成する、傾斜変換点に近い扇状地上に立地するものと考えられる。善根寺春日神社の北側尾根に発する大川ないしその先行河川の左岸に位置する。遺跡は現在の標高で19～22mを測る。まず善根寺遺跡周辺の人間活動の痕跡を概観してみたい。本遺跡の東方、山腹にある草香山遺跡

では、後期旧石器時代から縄文時代草創期の有舌尖頭器が採集されている。また善根寺山遺跡では、縄文時代中期の土器片が採集され府下では数少ない該期の遺跡として知られる。後氷期以降、気候の温暖化に伴い、現在の河内平野に海水が流入する。前面の海、背面の森林山地の環境は、縄文時代早期以来の遺跡の立地条件としては最適であり、日下・神並・縄手・馬場川など学史的に著名な遺跡が点在する。本遺跡の南方約500mの地点にある日下遺跡は、戦前から「日下貝塚」として有名で後期から晩期の土器とともに土壙墓・斐棺墓・竪穴住居址などが発見されている。

農耕の開始とともに、新たな集落が扇状地だけでなく低湿地にも営造される。本遺跡北西方約500mの中垣内遺跡では、前期から後期の土器、石器や木製品が出土し、初期農耕の実態を考える上で重要な遺跡である。さらに南方に転すれば、鬼虎川遺跡や西ノ辻遺跡があり、中期の拠点集落が営まれている。



第3図 古代の河内郡

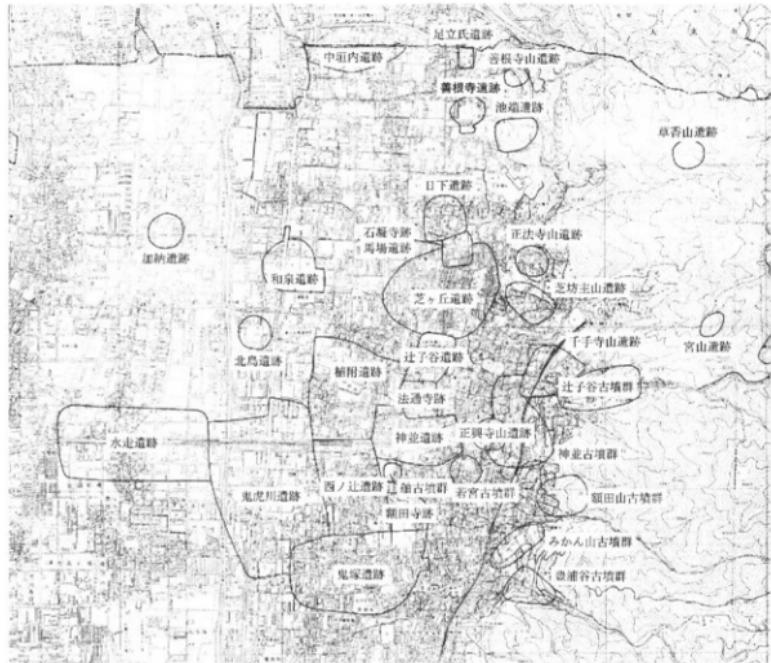
古墳時代では、前掲の日下遺跡でウマが埋葬された土坑や溝が発見されたのをはじめ、善根寺町には単独の後期古墳が点在している。戎山古墳、坊主山古墳、尊上山古墳がそれである。戎山古墳はすでに消滅しているが出土の須恵器は現存している<sup>\*</sup>。とくに注目されるのは、今回調査地のわずか東50mの善根寺町1丁目667番地付近で人物埴輪が採集されていることである<sup>\*\*</sup>。今回混入品であるが、円筒埴輪が多く出土しており、調査地周辺に未知の古墳が所在することがうかがわれる。

本遺跡の東に隣接する池端遺跡は縄文時代から古墳時代の遺物散布地であるが、調査が行われておらず実態は不明である。わずかにその東方の山腹で奈良時代の火葬墓が不時発見され、その内部から蔵骨器が出土した例が知られるのみである\*\*\*。8世紀前半に比定される。今回検出した古代集落の墓域を考えるてがかりになると思われる。河内国河内郡の様相は第3図にまとめた。「まとめ」で再説するが、古代の善根寺遺跡を考える上で興味深いのは、遺跡周辺に式内社が見られないことである。むしろ、現在の鎮座地でみれば、大東市中垣内(謙良郡)にある須波麻神社が石切削箭神社よりも至近距離にある。これらの点も一考の余地がある。善根寺町周辺の遺跡分布が稠密ではないのは、ひとえに開発がなく調査例が少ないと起因し、今後の発見に俟つべきである。

\* 東大阪市教育委員会『東大阪市の古墳(改訂版)』、2001年。

\*\* 松田順一郎「善根寺町出土の人物埴輪」(『調査会ニュース』15、1980年。)

\*\*\* 福永信雄「善根寺町発見の古代火葬墓」(『調査会ニュース』14、1979年。)



第4図 善根寺遺跡とその周辺の遺跡

### III 遺 跡

調査は、直前まで営農された耕土・床十層を重機で除去し、それ以下を人力で掘削し遺構や遺物の検査を図った。遺物の取り上げや遺構平面図の作成にあたり国家座標系に準拠した基準杭を打設した。基準杭打設は調査協力者を通じ測量業者に委託して実施した。地区割は5mメッシュとし、東西はA、B、C、とアルファベットで、南北は1、2、3、とアラビア数字を用いて南東杭を地区名の表示とした。調査地北西端はA 1、南東端はH 6となる。地区割表示と座標値との対照は第5図に示した。

次に調査地の現況と併せて近現代の遺構についてこの項で触れておきたい。調査着手まで、調査地は棚田として利用されており、東側棚田を段I、西側棚田を段IIと仮称して調査を進めた。その後、段Iの南側と段IIの西側に埋没した新たな棚田が発見された。前者を段III、後者を段IVとした。現代に至り、段IIIと段IVに客土・埋立ての上、耕地面を拡大したことがわかった。このためそれぞれ遺構と捉え、SX 1、SX 2と呼称した。段の崖面直下には耕作用の排水溝が設けられていた。段IV(SX 2)の埋土は重機で除去したが、埋没時期を探るため、段III(SX 1)は人力で掘削した。その結果、埋土から近世期以降の陶器片が出土し、該期以前には遇らないことを確認した。

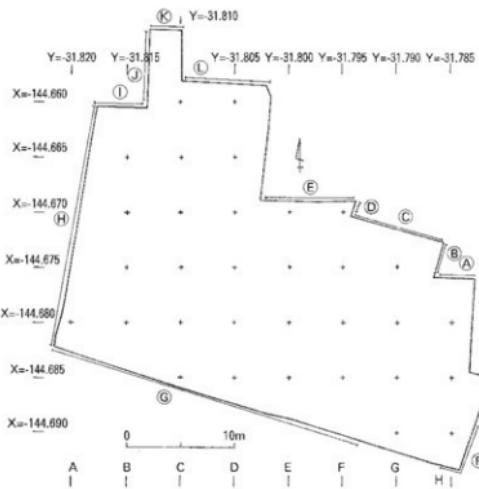
検出した層位は以下のとおりである。

第1層 耕上層。

第2層 床上層。調査地西側は段IV(SX 2)にあたり床上層直下から第3層までマンガン粒の沈着が著しい砂質上がみられた。これを第2L層とした(7.5YR5/4にぶい褐色細縫混じりシルトに5Y5/1灰色シルトを中量含む層)。

第3層 7.5YR3/3暗褐色細縫混じりシルト質細粒砂。上部はマンガン粒の沈着が激しい。第3層上面は、中世～近世期の鋤溝や崖の遺構面を形成する。奈良～平安時代の土器に混じり中世期の遺物を含む。

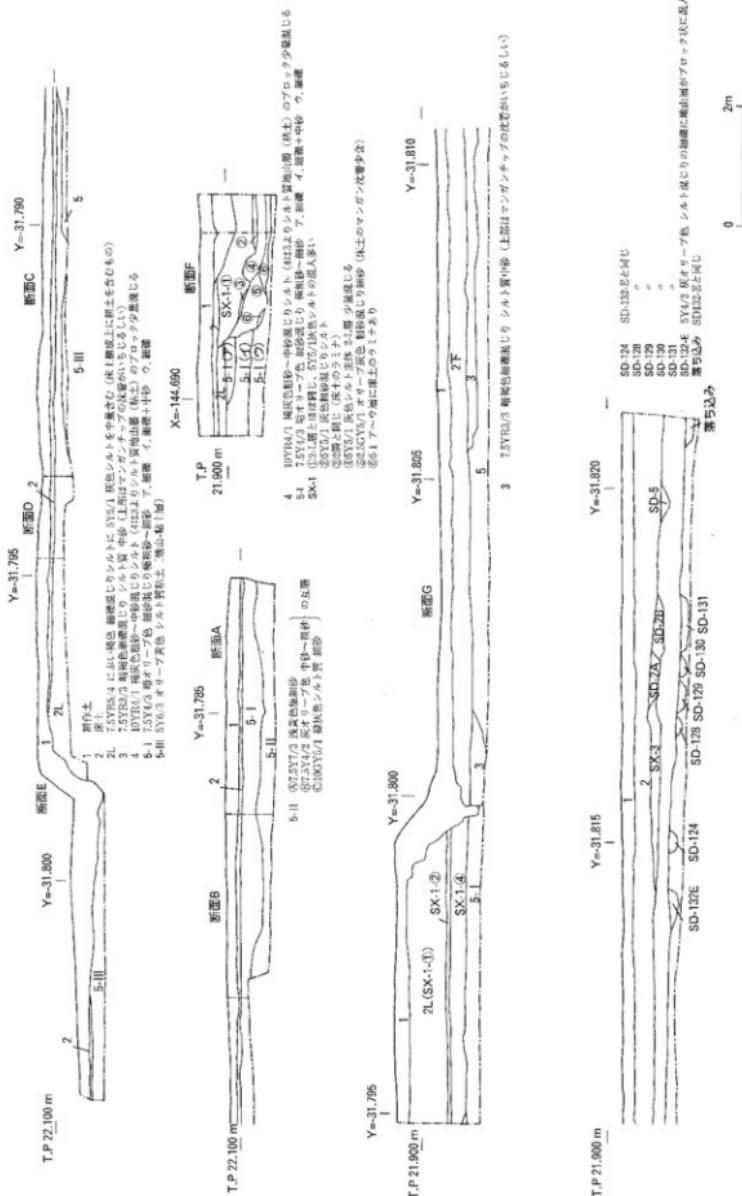
第4層 10YR4/1褐色粗粒砂～中粒砂混じりシルト。調査地中央から北西部の段IIでのみ分布



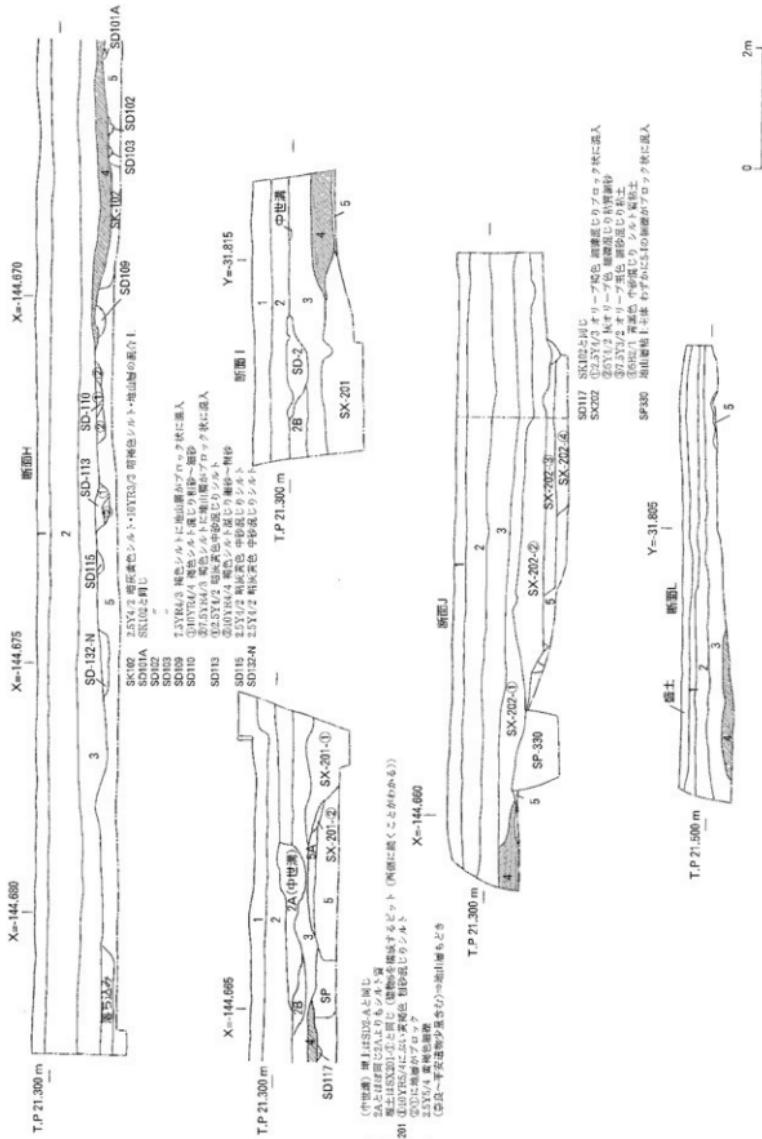
第5図 調査地地区割・断面図の位置図

する層である。東側の段Iでは全く見られない。奈良～平安時代の遺物包含層をなす。

- 1 - 第5層 地山層。上面は奈良～平安時代の遺構面を形成する。上層は5Y6/3オリーブ黄色シルト質粘土、中層は7.5Y4/2暗オリーブ色細粒砂混じり極粗粒砂、下層は7.5Y7/2浅黄色極細粒砂・7.5Y4/2灰オリーブ色中粒砂～粗粒砂・10GY5/1緑灰色シルト質細粒砂の互層であった。
- 2 - 第5層の上面にも少量の奈良～平安時代の遺物がみられた。調査地東側では、近現代の耕作により、第5層の上層まで削平され、第2層の直下には第5層の中層以下が露出するのが認められた。



第6図 調査地北縫・東縫・南縫断面図



第7図 調査地西壁・北壁断面図

## IV 遺構

### 1) 中世～近世期の遺構(第8図)

第3層上面で、溝51条・落ち込み1ヶ所・ピット2個を検出した。遺存状態は極めて悪く、とくに段IIの西端からSD42・49の東端まで全く遺構が空洞になっているのは近現代の耕作活動によるものである。また段I全面および段IIの東側では第2層の直下に第5層(地山層)が露出するため、後記の奈良～平安時代の遺構と錯綜して該期の遺構が検出された。この場合は遺構埋上が明瞭に異なることで区別している。埋土から全て耕作活動に伴う遺構と考えられる。代表的な遺構のみ例示したい。

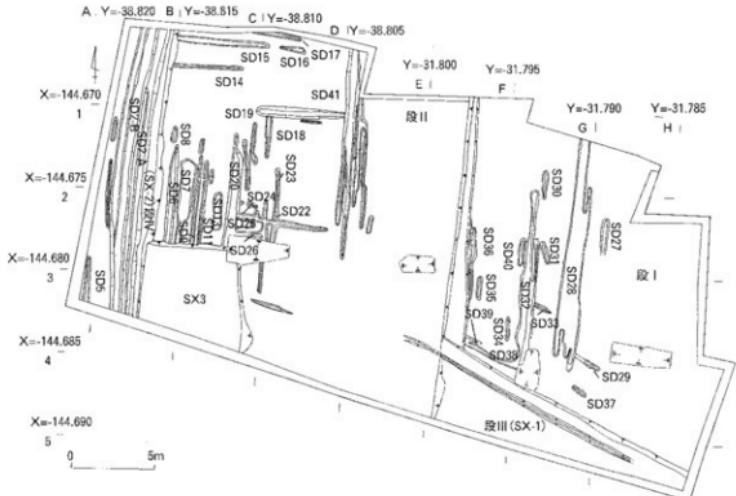
SD2 B2～B5区・段IV(SX2)の内部で検出。溝底面のレベル差から北から南へ流下する溝。幅1.9m深さ24cmを測る。溝内埋土の観察から西側の溝(SD2-B)の堆積後、東側の溝(SD2-A)が流下したことが知られた。SD2-Bの埋土は5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂混じり極細粒砂でマンガン粒を斑状に含む層である。SD2-Aは2.5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂。埋土を除去すると断面形は緩やかな皿状で中央部に敵塹高まりが現出する。瓦器塊細片が出土。

SD7 C3～C4区で検出。南端はSX3に接続する溝。幅0.4～0.9m深さ5cmを測る。埋土は7.5Y4/2灰オリーブ色粗粒砂混じり極細粒砂。粘性でマンガン粒を中量含む。SX3に伴う敵溝。瓦器塊(第22図139)他が出土。

SD15 C2区で検出。段IV(SX3)に接続する東西溝。幅0.4m深さ9cmを測る。埋土は7.5Y4/2灰オリーブ色粗粒砂に2.5Y6/3にぼい黄色シルトを含む。

SD20 C3～C4区で検出。南端がSX3に接続するとともにSD24と直角に交叉する。南へ流下する溝。幅0.25～0.7m深さ12cm。埋土はSD7と同じ。敵溝。瓦器塊(第22図138・141)が出土。

SX3 C4～C5区で検出。東西6m南北6m以上深さ17cmを測る。方形を呈する。敵溝が接続することから島状遺構と推定される。灰釉陶器碗(第22図146)が出土した。



第8図 中世～近世期遺構平面図

## 2) 奈良～平安時代の遺構(第9図)

第5層上面で奈良～平安時代の遺構を検出した。主なものに、掘立柱建物6棟・土坑6基・落ち込み2ヶ所・溝35条がある。中世～近世期の遺構と区別するため、遺構番号は掘立柱建物を除いて3桁の数字を付けて了。調査地中央から西側で第4層が広がる箇所では遺構は深くまで遺存していたが、東側では後世の削平を受けており概して浅い。とくに掘立柱建物3の東側では柱穴若干を検出したにとどまる。遺構は、奈良時代中期(I期)・奈良時代末期(II期)・平安時代前～中期(III期)に属する。I～III期の時期区分は出土遺物の検討を踏まえ、VI-1)で詳述したい。

**掘立柱建物1**(第10図) E1～E2区で検出した3間(6.3m)×3間(5.4m)の南北棟建物である。II期。柱間は桁行が7尺、梁行が6尺である。床面積は34.0m<sup>2</sup>。建物南北軸は座標軸と一致する。柱掘形は方形を呈し一辺1m前後で深さ60cmを測る。柱痕跡は径35～40cmである。建物を構成するSP258の柱痕跡下部では根固め石がみられた。

**掘立柱建物2**(第13図) C5～E5区で検出した4間(8.4m)×2間(4.2m)の東西棟建物である。III期。柱間は桁行・梁行ともに7尺である。床面積は35.3m<sup>2</sup>。建物南北軸は座標軸と一致。柱掘形は円

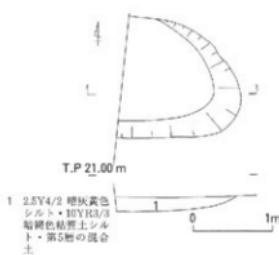


第9図 奈良～平安時代遺構平面図

形を呈し径40~60cm深さ40cm前後を測る。柱痕跡は径20cm。西から1間目に間に仕切りの柱穴がある。SP140柱痕跡の側に拳大の角礫が遺存する(図版6)。柱を鉛直に据え立てるための装置と考えられる。今これを「根支え石」と仮称しておく。また南面・北面の各柱通りの延長線上にSP123・S P125が載るが現状では掘立柱建物2と別個の扱いにしている。

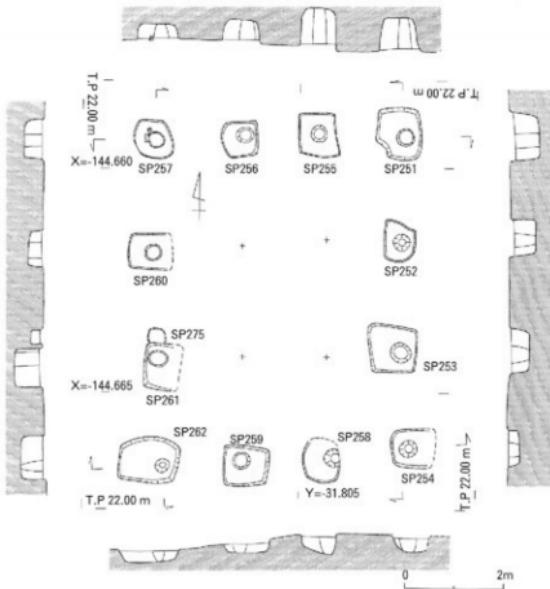
**掘立柱建物3(第16図)**  
E3・F3~E5・F5区で検出した4間(9.6m)×3間(7.2m)の南北棟建物である。II期。柱間は桁行・梁行ともに8尺を測る。床面積は69.1m<sup>2</sup>。

南北軸は座標軸と一致。柱掘形は方形または梢円形を呈する。SP105は方形で一辺0.9m深さ0.4mを測る。SP103は梢円形で長径0.9m短径0.6m深さ45cmを測る。柱痕跡は径35~40cm。東面の柱通りに比べて、西面・北面・南面の柱穴は段境の整地を受け遺存状態は極めて悪い。

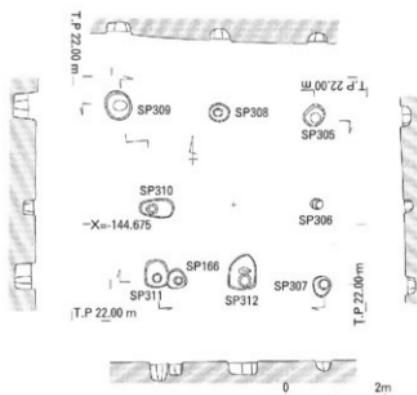


第11図 SK102実測図

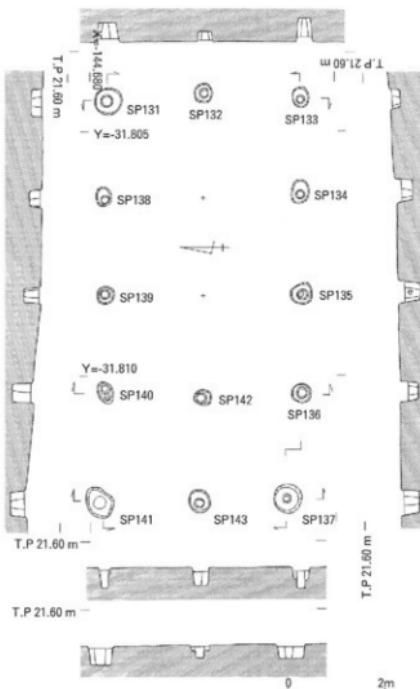
**掘立柱建物4(第12図)** D3~D4区で検出した2間(3.6m)×2間(3.6m)の方形建物である。II期。柱間は桁行・梁行とも6尺見当であるが、北面の柱通りのみ7尺となりSP310が西へ張り出し歪



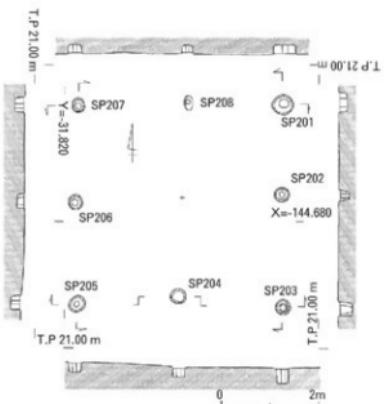
第10図 中世～近世期遺構平面図



第12図 掘立柱建物4実測図



第13図 挖立柱建物2実測図

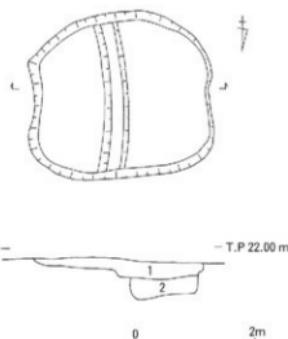


第14図 挖立柱建物5実測図

な平面形を呈する。床面積は $13.0\text{m}^2$ 。東面の柱通りは座標軸と一致する。柱掘形は円形を呈するが規模は大小の差がある。SP310は径50cm深さ45cm、SP306は径30cm深さ20cmを測る。柱痕跡は径20~25cm。柱穴の規模や柱通りが均質でないことから主要建物とは考えられず、厩屋などの付属家屋と推定される。SP312に根えき石がみられた(図版6)。

**掘立柱建物5(第14図)** B4~B5区で検出した2間(4.2m)×2間(4.2m)の方形建物である。I期。柱間は桁行・梁行とも7尺である。床面積は $17.6\text{m}^2$ 。建物南北軸は座標軸と一致する。柱掘形は整円形を呈し、径30cm深さ20~30cmを測る。柱痕跡は径15~20cm。柱穴の規模から掘立柱建物4と同様、付属家屋と考えられる。

**掘立柱建物6(第16図)** B1~C1区で検出した南北棟建物である。I期。II期以降の所産にかかるSX201・202により北面柱通りは破壊を受けているため建物全形は不詳。ただし西壁断面に南面柱通り延長の柱穴が見える(図版8)ことか

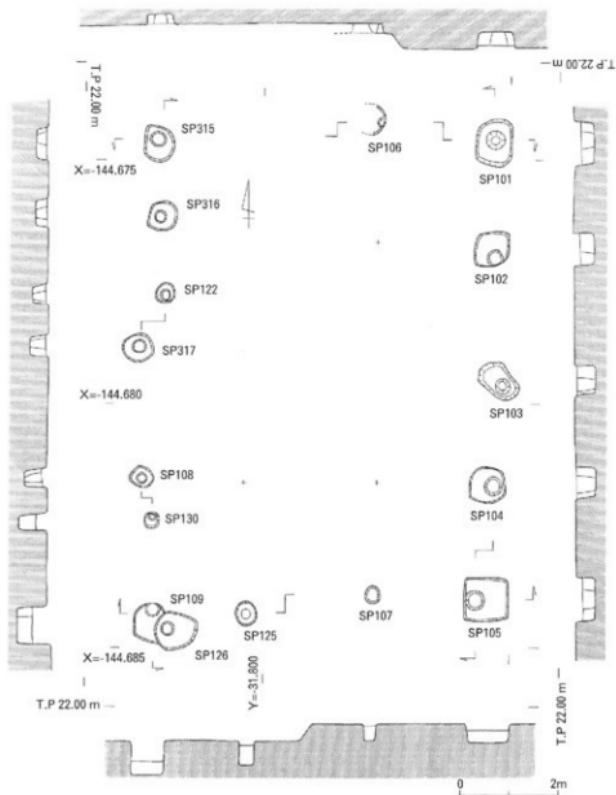


1 2.5Y4/2 オリーブ褐色 細緻流じシリット  
2 2.5Y4/2 オリーブ褐色土に砂層がブロック状に混入

第15図 SK101実測図

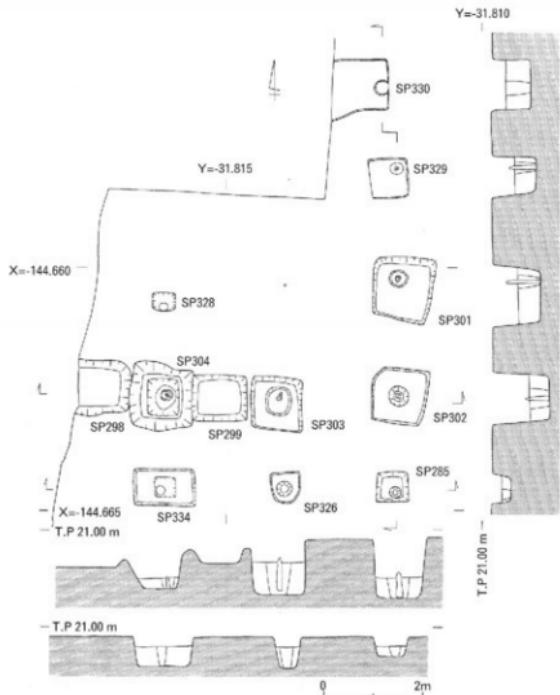
ら、桁行3間(7.2m)×梁行3間(6.3m)の規模と考えておきたい。柱間は桁行8尺、梁行7尺となる。床面積は45.4m<sup>2</sup>。南北軸は座標軸と一致する。柱掘形は方形を呈し一般1.0~1.2m深さ1.2mを測る。大型の柱掘形をもつ建物といえる。SP330を除く全ての柱穴に柱材が遺存していた。最も良好なものはSP302の柱材で長さ66cm径15cmを測る(第36図400)。樹種は広葉樹とみられる。柱痕跡は35~40cmであった。南面に廂が取り付く。廂の出は6尺(1.8m)、廂柱間は8尺である。廂柱の掘形は方形ないし長方形を呈する。SP334は長方形を呈し長辺1.2m短辺0.8m深さ60cmを測る。またSP303・304の各西側に方形の浅いピットがある(SP298・299)。これらを連続した溝状造構とし、掘立柱建物6の柱穴營造を布掘りに伴うとする蓋然性は否定できないが、現状では審らかにできなかった。

第16図 掘立柱建物3実測図



第1表 建物規模一覧

建物名	棟方向	規模	廂	桁行		梁行		廂		備考
				寸法 (m)	1間 尺数	寸法 (m)	1間 尺数	寸法 (m)	1間 尺数	
掘立柱建物1	南北	3×3		6.3	7尺	5.4	6尺			34.0
掘立柱建物2	東西	4×2		8.4	7尺	4.2	7尺			35.3 間仕切りあり
掘立柱建物3	南北	4×3		9.6	8尺	7.2	8尺			69.1
掘立柱建物4(方形)	2×2			3.6	6尺	3.6	6尺			13.0
掘立柱建物5(方形)	2×2			4.2	7尺	4.2	7尺			17.6
掘立柱建物6	南北	推定3×3 南廂		7.2	8尺	6.3	7尺	7.2	8尺	45.4



第17図 掘立柱建物6実測図

図)。

**SK102(第11図)** B2区で検出した土坑。I期。西側が調査地外へ延びるが円形を呈するものと考えられる。現況で南北1.4m東西1.6m深さ20cmを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色シルト・10YR3/3暗褐色粘土質シルト・第5層(地山層)の混合土である。平城宮Ⅲ～Ⅳの土師器・須恵器が中量出土した(第20図)。

**SX201・SX202(第9図)** B1～C1区で検出した落ち込み状遺構。埋没時期はII期以降。拡張トレンチで別個に検出したため遺構番号を替えて取り扱ったが本来は同一の遺構と考えられる。遺構が埋没するのは掘立柱建物6より後出であるが、遺構の起因となったのは今回の調査地のすぐ北に推定している自然河川によるものと思われる。深さは50cmまで確認した。平城宮VIの土師器・須恵器が少量出土した(第19図)。

**溝(第9図)** 奈良～平安時代の溝を観察しておく。SD132はL字状の溝である。区画溝と見られるが内部の掘立柱建物5が付属家屋と考えられ再考を要する。幅0.9～1.2m深さ14cmを測る。SD104は東西溝。最大幅1.0m深さ14cm。溝の中では出土量は多く、土師器の皿や壺が見られた(第19図)。SD102・SD107は掘立柱建物6の南面廻に沿っており建物に伴う何らかの施設と見られる。また調査地の西側に密集する溝群は形態から耕作に伴うものが含まれることが想定できる。

**SK101(第15図)** C1区で検出した円形の土坑である。II期。径2.9m深さ70cmを測る。土坑内面に掘立柱建物6の柱穴が幅較するが、断面観察により建物廃絶後に土坑が営造されたことが判明した。埋土は2層に区分される。①層は2.5Y4/2オリーブ褐色細緻混じりシルト、②層は第5層(地山層)を主体に2.5Y4/2オリーブ褐色細緻混じりシルトをブロック状に含む層である。②層は西北端の凹部に堆積する層である。①層はその埋没後土坑全面にわたって堆積したもので、断面形は浅い皿形を呈する。遺物は②層内からは皆無に近かったが、①層からは平城宮Ⅲ・Ⅳに属する土師器・須恵器・製塙土器が一括出土した(図版7、第20・21図)。

## V 遺 物

以下に今回の出土遺物について概要説明を行う。記述は奈良～平安時代の遺構出土土器を優先し、柱穴(建物)・溝・土坑の順、次に中世～近世期遺構出土土器とし遺物包含層(第3層～第5層上面)出土上器をみていく。SK101以外の製塙土器、弥生土器、埴輪、瓦、鉄製品・石製品は一括して記述する。奈良～平安時代土器の器種・器形・手法等については、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』、古代の土器研究会『古代の土器 都城出土の土器集成』に準拠し、年代観の表示も同書に倣った。ただし破片資料が多数であるため、壺A I・壺A IIなど法量による細分は一部を除き、行っていない。

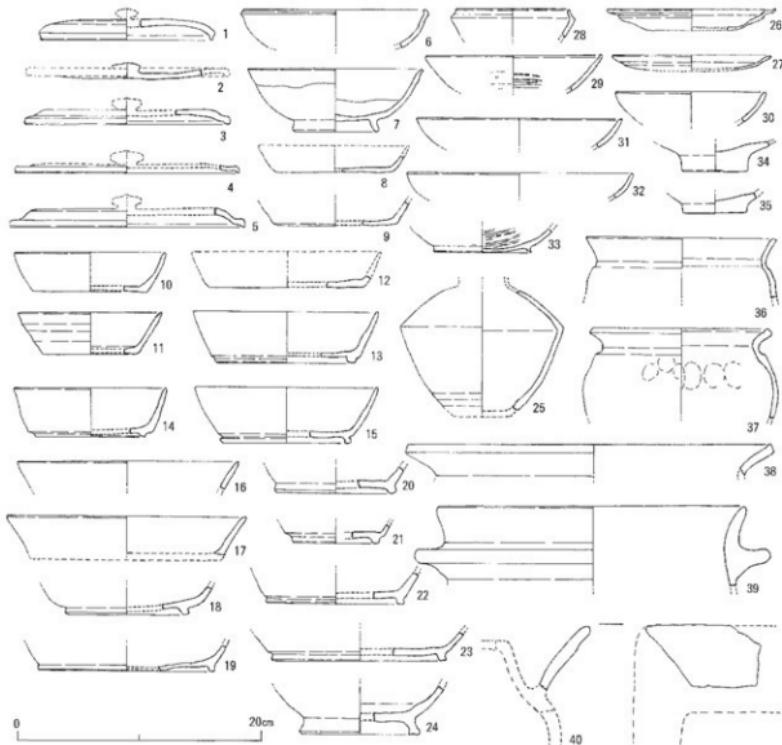
### 1) 土器・陶磁器

**各柱穴出土土器**(第18図) 各建物を構成する柱穴からみていく。その他の柱穴出土土器については、特徴のある器種・器形のみ取り上げる。柱穴や次の溝など出土遺構が多岐にわたるため、本文で説明する以外の土器の出土遺構は下表に掲げた。建物1柱穴出土土器には須恵器壺B蓋(2)・壺A(8・11)・壺B(15・21・23)・壺C(6)、土師器皿A(31・32)・甕A(36)がある。須恵器壺C(6)は大きく開く体部から屈曲後、口縁部は内折し端部を巻き込む。端面は段を持つ。平城宮IIIに位置付けられる。壺B(15)の高台は外方八の字状に張り出し、断面は丸みを持って接地する。口径14.6cm、高さ4.5cm。建物2山土器には灰釉陶器碗(7)、須恵器壺A(12)、土師器皿(26・27)・甕A(37)、黒色土器A類塊(33)がある。灰釉陶器碗(7)は腰高の器形を持ち、体部は伸びやかに丸く開く。長台形の高台が付く。平城宮跡出土例から美濃窯虎渓山1号窯式期併行(10世紀半ば)と考えられる。土師器皿(26・27)はての字状口縁を持つ。建物3では須恵器壺B蓋(3)が、建物4では須恵器壺B蓋(4)、土師器壺A(29)が出土している。上師器壺A(29)は体部外面にヘラケズリをとどめC手法と思われる。建物6出土土器には須恵器壺A(9・16)・甕K(25)、白磁碗底部(34・35)がある。須恵器壺K(25)は算盤形の体部を持ち、平城宮IIとみられる。その他の柱穴では須恵器壺B(14)と土師器壺E(28)がSP241〔SK102南東1m〕から出土している。須恵器壺B(14)の高台は逆三角形状を呈し口縁部は直立して立ち上がる。火燐がある。内外面とも黄灰色を呈し他の須恵器の色調と大きく異なる。このことから猿投窯ないし湖西窯産の可能性がある。

**各溝・落ち込み出土土器**(第18・19図) 溝・落ち込みで比較的の出土量が多いのはSD104である。土師器皿A(53・54)・甕A(55)・甕C(56)・壺甕の把手(59)・羽釜(60)が出土した。皿A(54)の内面には斜方射状暗文が施される。口径21.6cm、高さ3.0cm。また甕A(55)・甕C(56)の形態から概ね平城宮II～IIIに位置付けられる。SD117・135は建物6の雨落溝の可能性があり、SD117から須恵器壺B(47)が、SD135から須恵器皿A(45)・甕A(61)が出土した。甕A(61)は口縁部が角張った形状を示し端面はロクロナデが強いため凹む。口径38.0cm、高さ8.3cm。平城宮IIとみられる。建物6の廃絶期に関連するSX201から須恵器壺B蓋(41)が、SX202から土師器皿A(52)が出土した。須恵器壺B蓋(41)は内面の返しをもち、飛鳥時代末期に属する。混入品。皿C(44)は口径14.0cmの小型品で平城宮VIと考えられる。その他SD119から須恵器壺B蓋(42)・壺L(51)が出土した。小型品で球形の肩部をもつ。平城宮VI。SD126から須恵器壺Bの転用甕(50)が出土。

第2表 遺物対照表

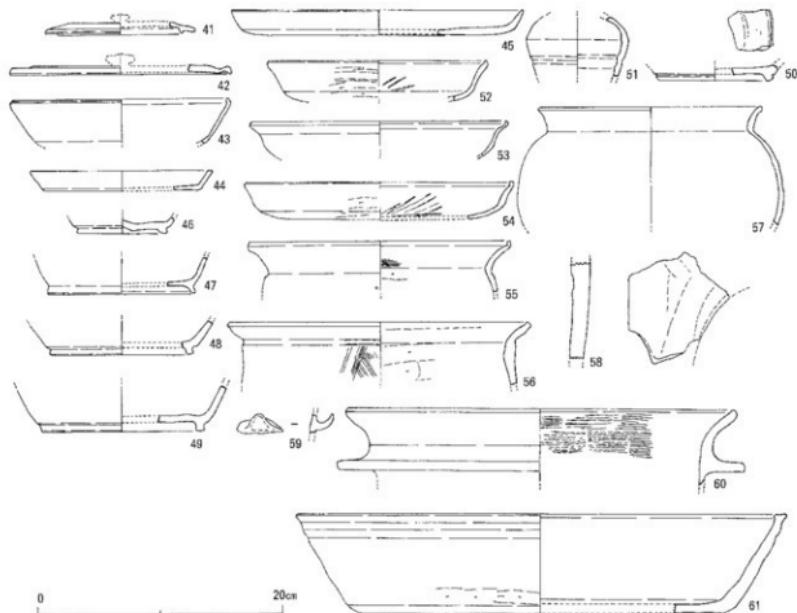
遺物番号	出土遺構
1	SP314
10・22	SP274
14	SP291
13・17	SP260
18・30	SP319
19	SP263
20	SP163
24	SP184
38	SP287
39	SP244
40	SP323
5	SD108
43	SD118
48	SD113
49	SD105
57	SD106



第18図 各柱穴・溝出土土器実測図

**SK101出土土器(第20・21図)** 今回検出した遺構のなかで最も出土量の豊富な土坑である。土坑は上層と下層に分かれるが、下層出土品は少ない。図示したのは全て上層出土土器である。出土土器には土師器、須恵器、製塙土器がある。所属時期は平城宮Ⅲと平城宮VIの2時期がある。

土師器(第20図62~79) 坯A・坯B・皿A・皿C・高杯・壺E・甕Aがある。坯A(62・63・65・66・69・70)は形状により2種に区分される。aタイプ(65・66)は口縁部下半が内彎、上半が外彎する形状で平城宮のA形態に対応する。65・66は内面に斜方射状の暗文を持ち、ともにb手法である。66は口径19.4cm、高さ3.7cm。内外面とも赤褐色。bタイプ(62・63・69・70)は口縁部が内彎ないし直線的に開く形状で、62・63・69は口縁部下半ないし体部との境に浅い稜が付く。62・69はc手法、63はa手法である。69は口径20.2cm、高さ4.6cm。内外面とも淡黄褐色。aタイプは平城宮Ⅲ、bタイプは平城宮VIに位置付けられる。坯B(74)は内面に斜方射状の暗文を持ち、八の字状に開く高台が付く。皿A(64・67・68・71)は64・71が坯Aのaタイプ、67・68がbタイプに相当する。61・68はc手法、67はb手法である。64は口径15.0cm、高さ2.3cm。内外面とも赤橙色。皿C(77)は屈曲後短く外反する口縁部が付く。口縁端面3ヶ所に鼠斑を留める。灯火器として使用されたことが知られる。口径10.5cm。

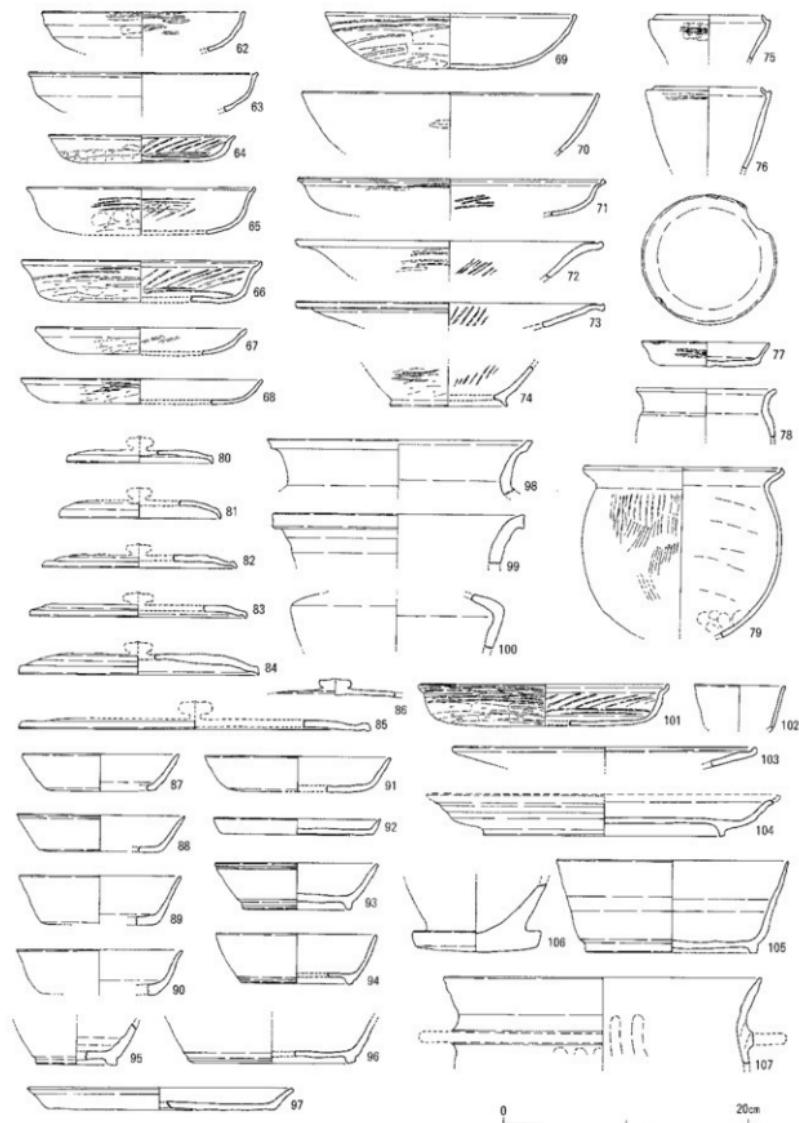


第19図 各溝・落ち込み出土土器実測図

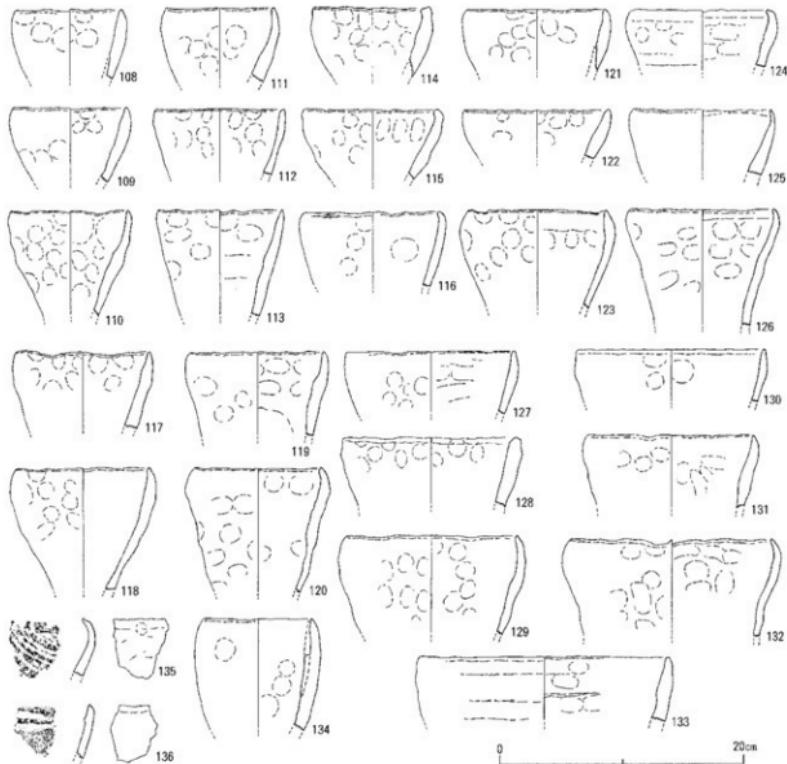
cm、高さ2.0cm。内外面とも黄橙色。平城宮VI。高環(72・73)はとともに坏部で水平の口縁部から端部は上方に摘み上げる。平城宮VI。壺E(75・76)は肩部で屈曲し短く内傾する口縁部が付く。ともに口径8.6cmを測る。平城宮VI。甕A(78・79)のうち78は短く外反する口縁部を持ち、色調は内外面とも暗赤褐色を呈する。牛駒西麓産である。79は球形の体部に口縁部はくの字に外反する口縁部が付く。端部を上方に摘み上げる。体部外面は粗いハケメ調整が施される。

須恵器(第20図80~100) 壱A・壺B・壺B蓋・皿C・壺C・甕A・甕Bがある。壺A(87~91)はともに器壁の厚い底部から屈曲後外彎して開く。口縁部と体部の境はない。90は口縁端部が僅かに外反する。88は口径13.6cm、高さ3.0cm。色調は87・88が暗灰色、89~91は淡灰色。平城宮VIとみられる。壺B(93・94)には93のように口縁部に強いロクロナデが施され凹線状を呈するものがある。93は口径13.2cm、高さ3.8cm。色調は93が淡灰色、94が淡灰白色を呈する。壺B蓋(80~86)は縁端部が直角気味に強く屈曲するもの(80・81)と屈曲が弱いもの(82~85)がみられる。概して前者は小型品、後者は中~大型品が多い。色調は淡灰色を呈する。皿C(92・97)は平坦な底部に短い口縁部が付く。92の口縁端部は尖り、97は角張る。92は口径13.6cm、高さ1.3cm。淡灰色を呈する。97は口径21.4cm、高さ1.9cm。淡灰色である。壺(95・100)は95が底部、100が肩部である。甕A(99)は口縁端部を下方に拡張する。甕B(98)は端部に面を持つ。

製塙土器(第21図) 器形を区分し概説する。まず①砲弾型を呈し口径13~20cmを測る一群がある(127~133)。次いで口径10cm前後の一群のうち、器形の角度から、②逆円錐形を呈するもの(109・110・118など)、③円筒形を呈するもの(119・134)に区分できる。これらを積山氏の型式分類を援用すると、



第20図 SK101・SK102出土土器実測図



第21図 SK101出土製塩土器実測図

①が1b類、②が4a類、③が5c類に該当する。ただし小片のため②と③の区分ができない資料も多い。①は鬼塚遺跡第13次調査土壙1出土例に相当する。土壙1から平城宮I～IIの上器が出土しており、製塩土器8世紀前半の基準資料となっている。一方、小型の②・③には積山分類の8世紀末資料に対応すると考えられる。このことは概ねSK101出土十師器・須恵器の2つの年代観(平城宮IIIと平城宮VI)に合致するものと思われる。胎土は白色砂粒を多く含み色調が淡黄褐色を呈するものが大部分を占める。その中で127・129・132は茶褐色を呈し生駒西麓産の胎土である。

#### SK102出土土器(第20図101～107) 土師器・須恵器が出土した。平城宮III～IVに相当する。

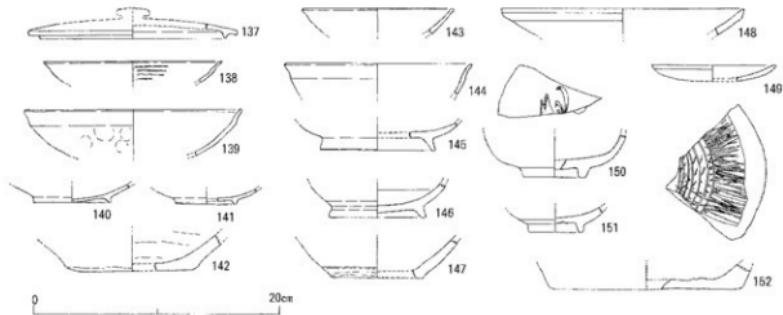
**土師器** 坯A(101)はb手法で内面に斜方射状暗文が密接に施される。口径20.2cm、高さ3.5cm。内外面とも淡黄褐色を呈する。盤A(103)は口縁部で水平に伸び端部を上方に摘み上げる。皿B(104)は内縁気味に屈曲し口縁部は外反すると思われる。羽釜(107)は生駒西麓産の胎土である。

**須恵器** 坯A(102)は小型品である。坯B(105)は深い器形を持つ。口径19.0cm、高さ7.6cm。淡灰色を呈する。鉢F(106)は丸みを持ち突出する底部片である。

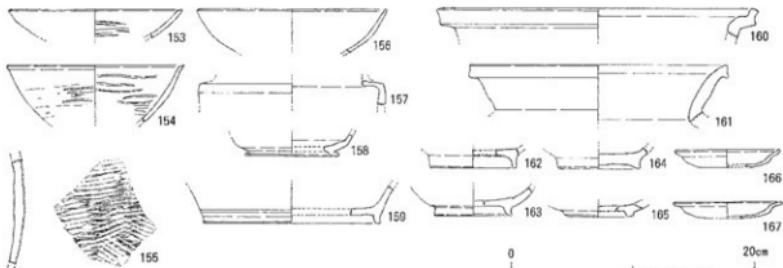
**中世～近世期遺構出土土器(第22図)** これらについては器種ごとにみていきたい。

須恵器坏蓋(137)は縁部内面にかえりを持つ。かえりは縁端部よりも外方へ突出する。飛鳥時代。SX 1 出土。瓦器塊(138～141)のうち138・139は体部片。ともに大和型。138の形状は浅い坏形を呈し、139よりも後出。鎌倉時代後半。140・141は底部片でともに断面台形の高台が付く。鎌倉時代初頭に属する。138・141はSD20、139はSD 7、140はSX 1 出土。東播系須恵器(142・148)で142は捏鉢の底部、148は鉢の口縁部である。148は端部の拵張が弱く、古相を示す。鎌倉時代。142はSD11、148はSX 1 出土。143～146は灰釉陶器碗である。143は復元口径12.0cmと小ぶりで、口縁端部の形状、器形の傾斜から皿の可能性がある。これらは10～11世紀代と考えられる。143はSD 7、144・146はSX 3、145はSX 2 出土。147は瀬戸美濃焼の豪底部、SX 2 出土。150・151は染付碗でSX 1 出土。152は備前焼壷鉢、SX 1 出土。いずれも近世前期～中期の所産である。なお混入品であるが、鎌倉時代の土師器小皿(149)がSP175から出土している。

**第3層出土土器(第23図)** 瓦器碗(153・154・156)、瓦質土器甕(155)、灰釉陶器壺(157)、綠釉陶器碗(163)、須恵器坏B(158・159)、壺A(161)、黒色土器塊(162・165)、白磁甕(164)、常滑焼甕(160)、土師器小皿(166・167)などがみられる。瓦器碗(153・154・156)はともに端部内面に沈線を持つ大和型である。154は深い器形に体部上半までヘラミガキが施される。鎌倉時代初頭に位置付けられる。綠釉陶器碗(163)は高台端部内面に沈線状の段を持つ。胎土は硬質(須恵質)で近江窯産と考えられる。須恵器坏B(158・159)のうち158の高台はハの字状に外方へ伸びる。黒色土器塊(162・165)で1



第22図 中世～近世期遺構出土土器実測図



第23図 第3層出土土器実測図

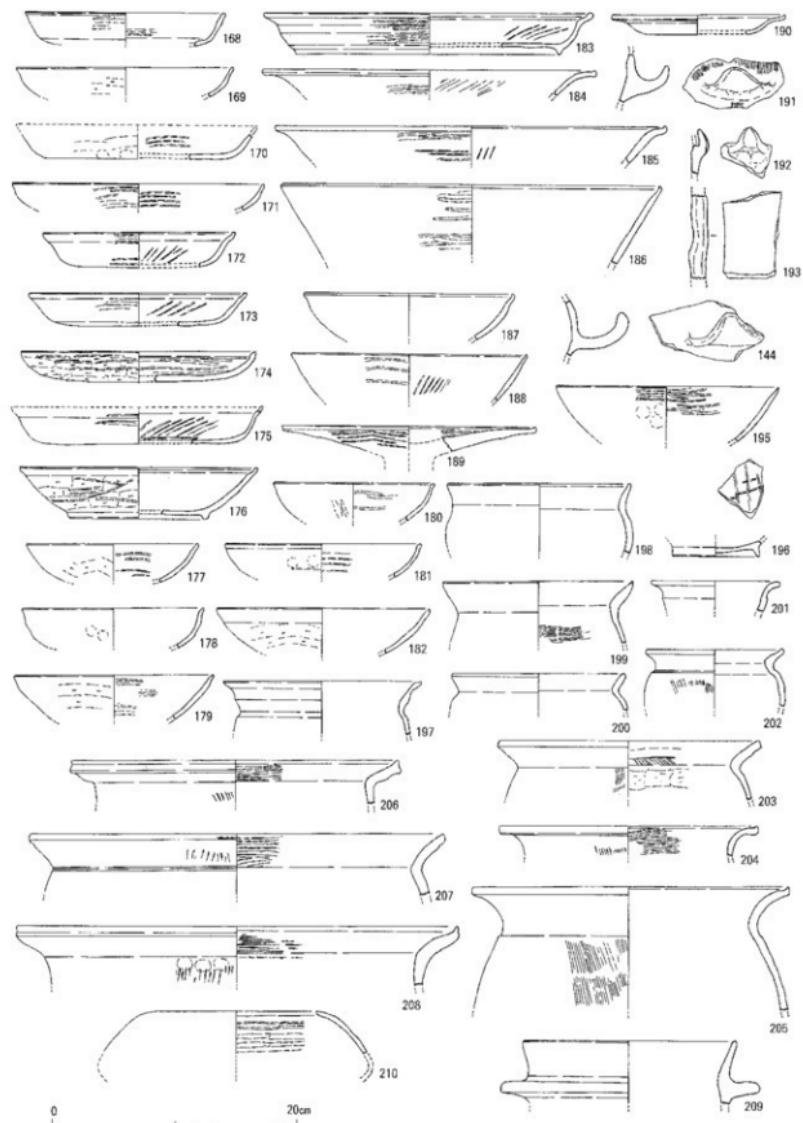
62はA類。高台は方形で下方に長い。165はB類である。常滑焼甕(160)の口縁端部は斜め上方に摘み上げられ縁帶状を呈する。中野氏の型式分類で4型式に相当する。鎌倉時代初頭(13世紀初頭)に位置付けられる。土師器小皿(166・167)はての字状口縁を持つもので、平安時代中期(10世紀代)に属する。

#### 第4層出土土器(第24・25図)

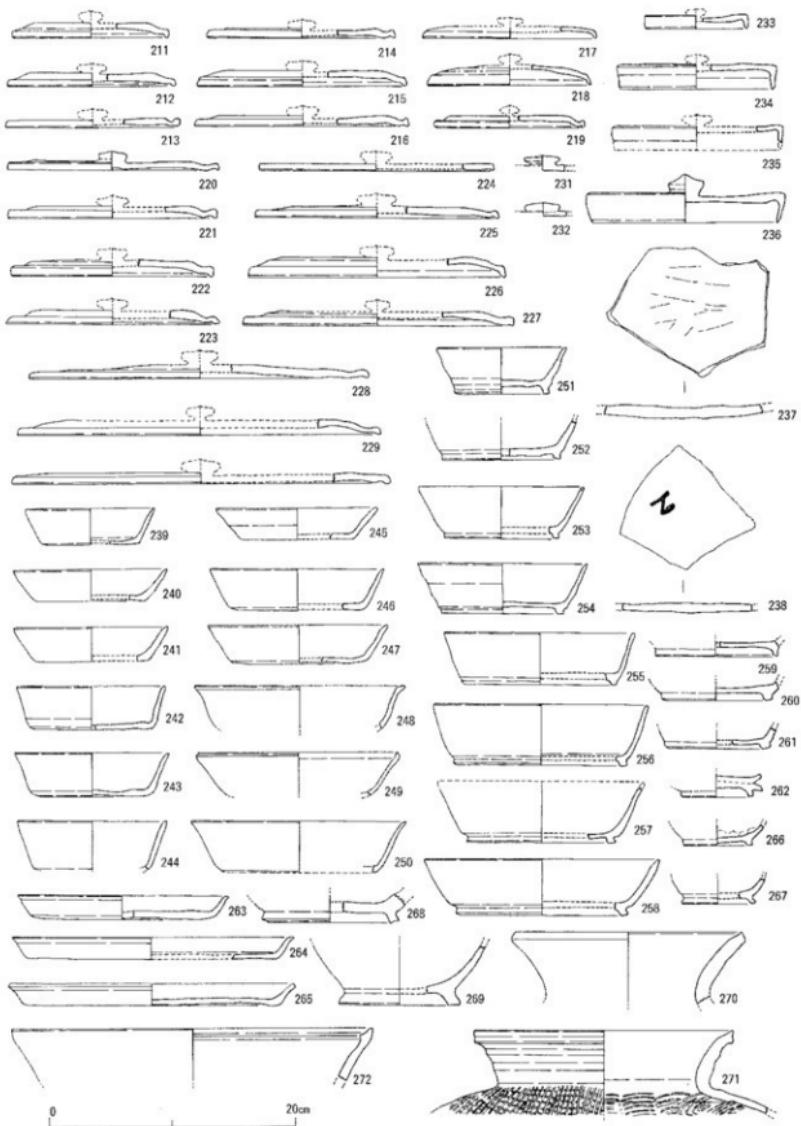
土師器(第24図) 奈良時代中期～平安時代初頭の壺A・壺B・皿A・皿B・塊A・塊C・高壺・盤・鉢A・壺B・甕A・甕B・甕C・羽釜・竈、平安時代中期の皿などがある。壺A(172・173・175・187・188)の内面には斜方射状暗文をとどめるものが多く、a手法である(172・173・175・188)。平城宮Ⅲに位置付けられる。壺B(176)は口縁部下半から底部への外面にヘラケヅリを施し、後へラミガキ調整。c手法。皿A(168～171・171)は口縁部を丸く納めるものがみられる。168・171はa手法、169・171はc手法。皿B(183)は平坦な底部から屈曲後、内彎して開く。口縁部で外折し端部は上方に肥厚する。内面に斜方射状暗文を施す。平城宮Ⅲ。口径19.0cm、高さ4.2cm。塊A(177・180～182)で180・181はa手法、177・182はc手法。塊C(178・179)は178がe手法、179がc手法。178は平城宮VIに属する。高壺(189)は壺部片で内面にヘラミガキがみられ平城宮IVと考えられる。186は盤または大型の壺Bとみられる。184・185は口縁部片で器形は決しがたいが、高壺ないし皿Bの破片か。鉢A(210)は鉢鉢形を呈する。平城宮IV。壺B(201)は口径10.2cmの小型品で短く外反する口縁部が付く。平城宮VI。甕A(197～200・202・203・205・207)には、大きく①口縁部が内方にないし上方に肥厚するもの(198・202・203)、②端部をそのまま納め断面が矩形や先端が尖るもの(199・200・203・207)に区分できる。なお197は端部が外折する形態を持つ。色調は暗茶褐色を呈し生駒西麓産とみられる。192・194は甕Bないし盤の把手である。甕C(204・206・208)の口縁部形態は甕Aの①と同様である。そのほか羽釜(209)、竈(193)がある。羽釜(209)は暗茶褐色を呈し生駒西麓産。190はての字状口縁を持つ皿で、平安時代中期(10世紀代)に位置付けられる。

黒色土器(第24図) B類の塊(196・197)がある。196は体部片で口縁部外面から内面全面にヘラミガキが施される。196は底部片で内面に斜格子状の暗文をとどめる。

須恵器(第25図) 壺A・壺B・壺B蓋・壺C・壺D・壺E・皿C・壺A蓋・壺底部・甕・転用碗・墨書き土器などがある。壺A(239～247・250)は復元の口径値を用いて区分した。239は口径10.4cmで小型品。240～244は12cm前後。245～247は13～14cmで中型品。250は17.4cmで中大型品とみられる。250の口縁端部は僅かに外反するが底部は平坦なため壺Aに含めた。体部は242のようにほぼ直立するものと245のように大きく外方へ開くものがみられる。壺B(251～257・259～261)も同様の分類を行う。251は口径10.3cmの小型品。253・254は13cm前後、255・256は15～17cmの中型品。壺B蓋(211～230)は口径12～14cmの小型品(211～213・217～219)、15～17cmの中型品(214～216・220～223)、19～22cmの大型品(224～227)、25～30cmの極大型品(228～230)に区分できる。一部に縁端部を下方に屈折するタイプ(217・218)がみられるほかは低く扁平で屈曲が強いタイプが多数である。230のように屈曲にシャープさがないものも少数ある。232の蓋つまみは宝珠の肩が張らない。壺C(249)は口縁部を内折し上方に巻き込む。平城宮Ⅲ。壺D(258)は底部からの屈曲後内彎気味に開き塊形を呈する。壺Bの中型品より古相。壺E(248)は口縁部で外反し先端は丸い。破片資料で屈曲面は不明だが口縁部形態から体部に縁の付くタイプとみている。皿C(263～265)は短い口縁部が付き、263・264は端部でさらに外反する。壺A蓋(233～236)は縁部を長く垂下する。小型品・中型品がある。266～269は甕の底部。266・267は底径から壺Lと考えられる。270～272は甕の口頭部。270は頭部が長く壺の可能性がある。272の口縁部内面下半には凸円状の張り出しを持つ。237は壺B蓋等の平坦面を転用した碗。238は墨書き土器。人偏ないしカタカナの「イ」と読める。



第24図 第4層出土土器実測図(1)

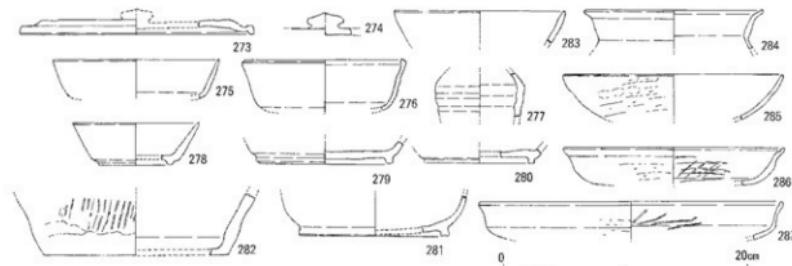


第25図 第4層出土上器実測図(2)

### 第5層上面出土土器(第26図)

土師器 壱A・壺A・壺A・甕などがある。壺A(286)・壺A(287)は斜方射状暗文をとどめ、b手法。286は器形から壺Cの可能性がある。平城宮VIか。壺A(285)はc手法。甕(284)はくの字状に外反し口縁部でさらに外折する。端部は丸く納める。

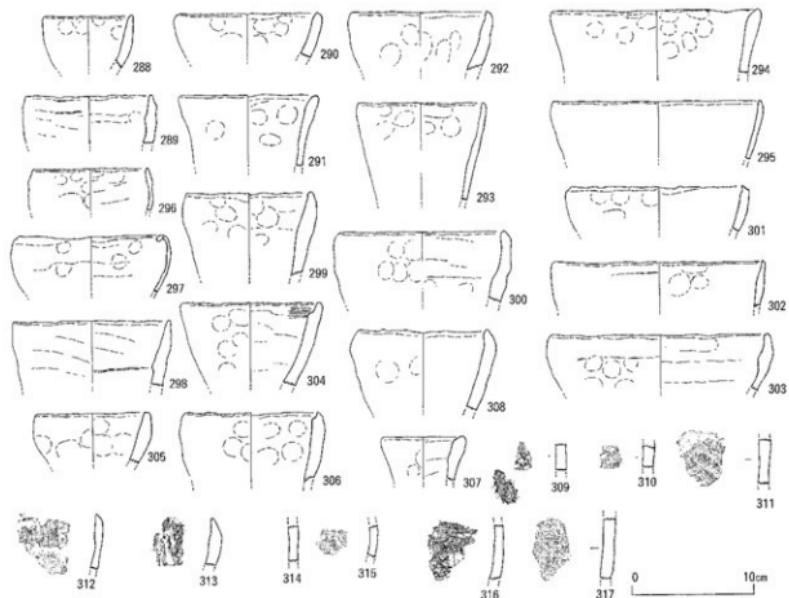
須恵器・灰釉陶器 壱A・壺B・壺B蓋・壺C・壺Gなどがある。壺A(275)は直立気味に開く体部。壺B(278)は口径10.4cmの小型品で短い高台が直下に付く。平城宮VIか。壺B底部(279~281)で280の高台は278と同形態である。壺C(276)は第4層出土例(249)と同様、口縁端部を内折し巻き込む。壺G(277)は肩部片で平城宮VIに通有の器形である。282は壺の底部片とみられる。この他に灰釉陶器碗の体部片(283)も出土している。第5層上面出土土器では、現状では平安時代中期に下る資料は確認していない。



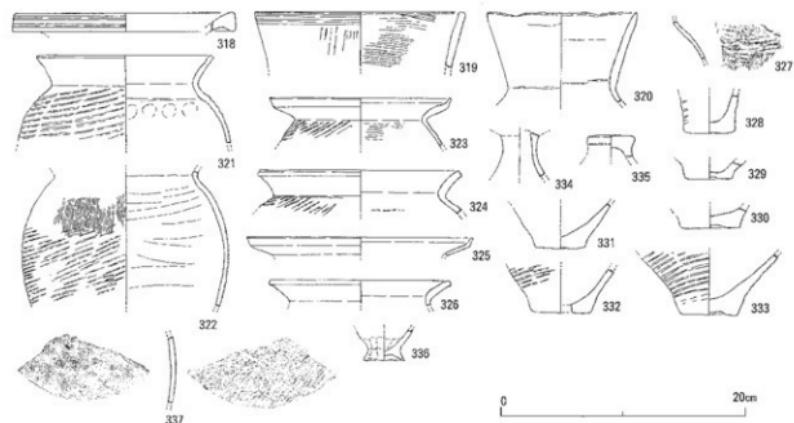
第26図 第5層上面出土土器実測図

製塙土器(第27図) SK101以外で出土した製塙土器を一括する。SK101出土例と異なり、器形の相違が認められる。積山分類を援用していく。1類に属するものに294・295・300~301がある。このうち295は1a類に、他は1b類に区分できる。2類には296・297が相当しともに2d類である。4類には292・293・304・305・308があり、292・305・308が4a類に該当する。304は口縁部内面にハケメをとどめ4c類と思われる。293は器壁が薄く4a類には該当せず、またハケメ調整も見られない。5類に属するものに289・291・299がある。いずれも5c類である。小細片の307~317は内面に布目をとどめ全て6類に該当する。百余は現状ではいずれの型式にも相当しない。288は復元口径7.2cm、307は6.0cmで小型品である。これらのうち2類の296・297は8世紀前半~中頃、その他は8世紀後半に属するとみられる。また294・301・306は淡茶褐色~暗茶褐色を呈し生駒西麓産と考えられる。288~291・294はSD135出土、292・293・295はSD104出土、312・315はSP184出土、308・313・314・316はSP285出土、299はSX202出土、296~298・300~302・309~311・317は第4層出土、303~307は第5層上面出土である。

弥生土器(第28図) 広口壺(318)・長頸壺(319)は口縁部に凝凹線文を施し、弥生時代中期に属す。320~337は後期土器である。321~327・337は甕の口頭部から体部片で、323・325は受け口状の口縁を呈する。337には外面に線刻がみられる。328~333は甕の底部。334・335は高壺の脚部。胎土は318・334を除き淡茶褐色~暗茶褐色を呈し生駒西麓産である。318はSP302、321はSP140、322はSP1、323はSP160、324はSD24、325はSD22、326はSD23、327・333はSD132、328はSP166、329はSP194、330はSK102、331はSX202、335はSP312、337はSP172、319・332・334・336は第4層、320は第5層上面の各出土である。全て遊離資料となっている。



第27図 各遺構・遺物包含層出土製塙土器実測図



第28図 弥生土器実測図

〔土器・陶磁器〕参考文献)

- ・横山 洋「律令制期の製塙土器と塩の流通」(『ヒストリア』141、1994年。)
- ・中野晴久「常滑・渥美」(『概説中世の土器・陶磁器』所収、1995年。)

## 2)瓦(第29~34図)

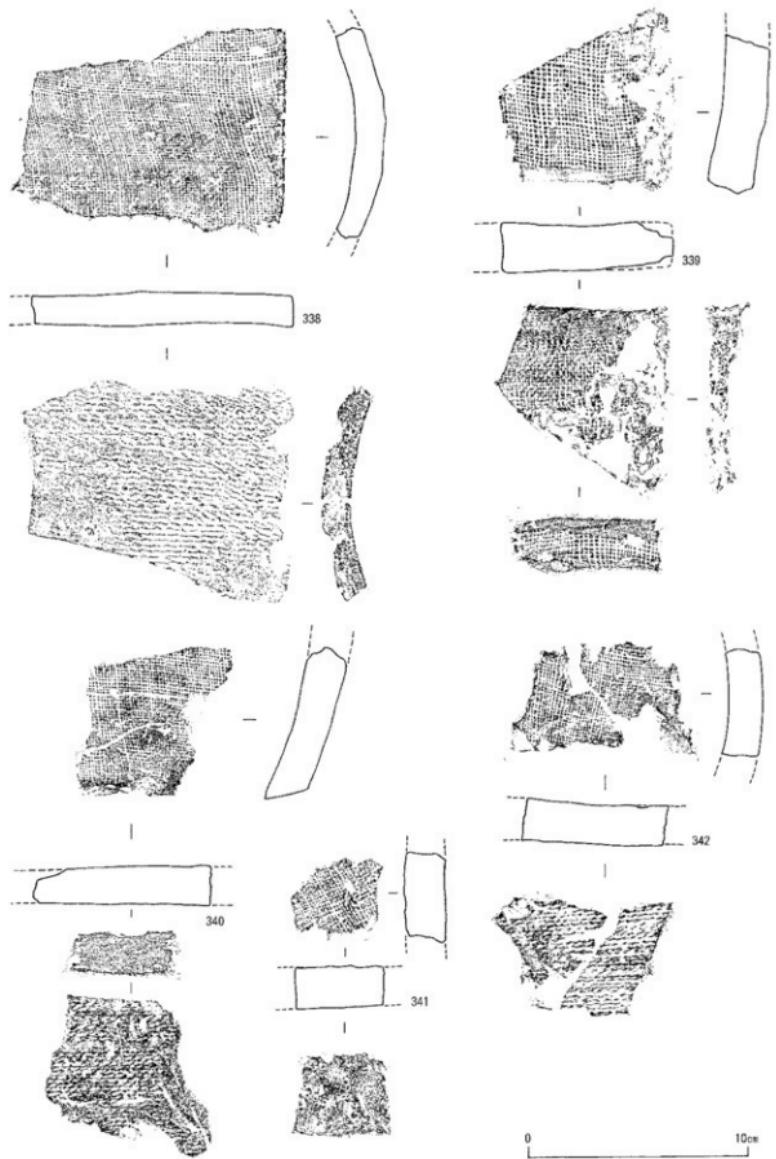
第3層、第4層、  
第5層上面の各層  
から、平瓦・丸瓦  
が少量出土した。  
出土層位、凸面・  
凹面の調整法は右  
の表を参照いただき  
たい。

軒平瓦(352)は  
瓦当部が本体から  
剥離した瓦片であ  
る。

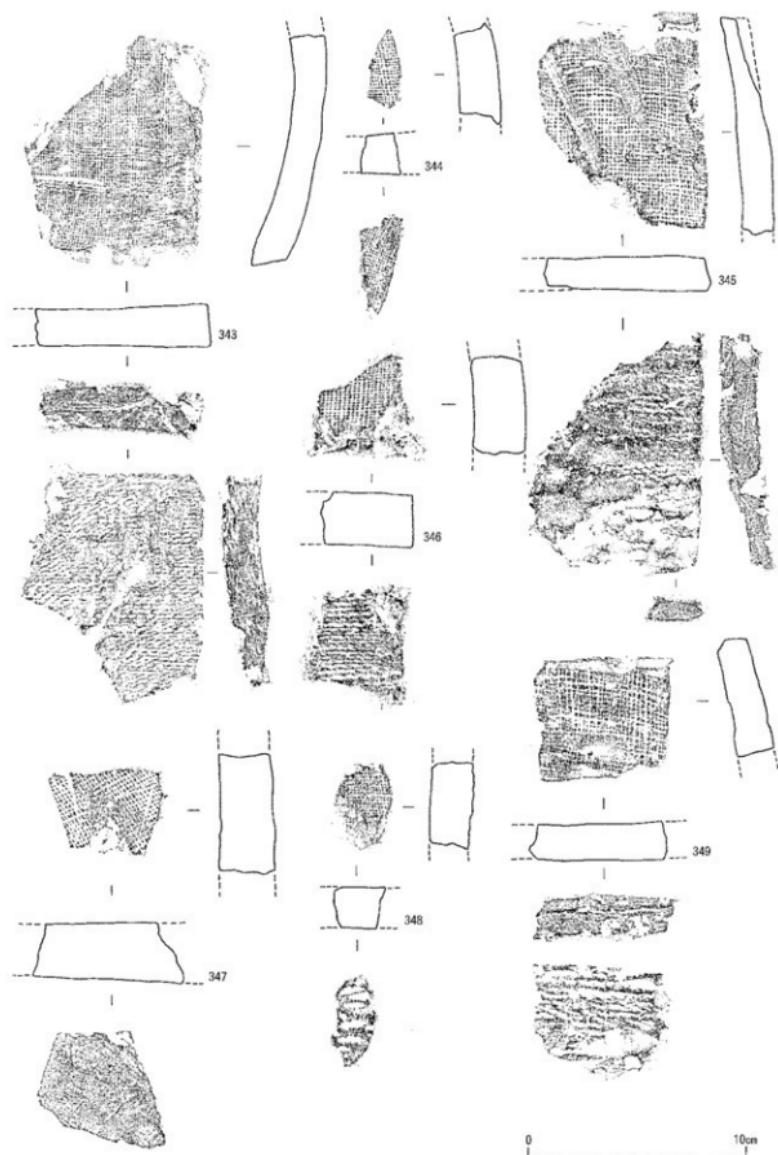
いわゆる「凸面  
布目平瓦」が散見  
する。339・341・  
344・351・355~3  
57・361・366がそ  
れに相当する。33  
9は側面にも布目  
痕が遺存する。側  
面は幅0.5~1 cm  
にわたって面取り  
が行われる。351  
は布目圧痕後、凸  
面端部に縱方向の  
ナデを施す。側面  
布目痕。面取りは  
ない。355の側面  
は布目圧痕後、幅  
1~2 cmの面取り。  
361は凹面端部に  
布目後幅1 cmの面  
取り。側面に布目  
後幅1.5 cmの面取  
り。368は凹面に  
はなれ砂が施され  
る。色調は暗灰色  
を呈するもの多  
い。

第3表 出土瓦一覧表

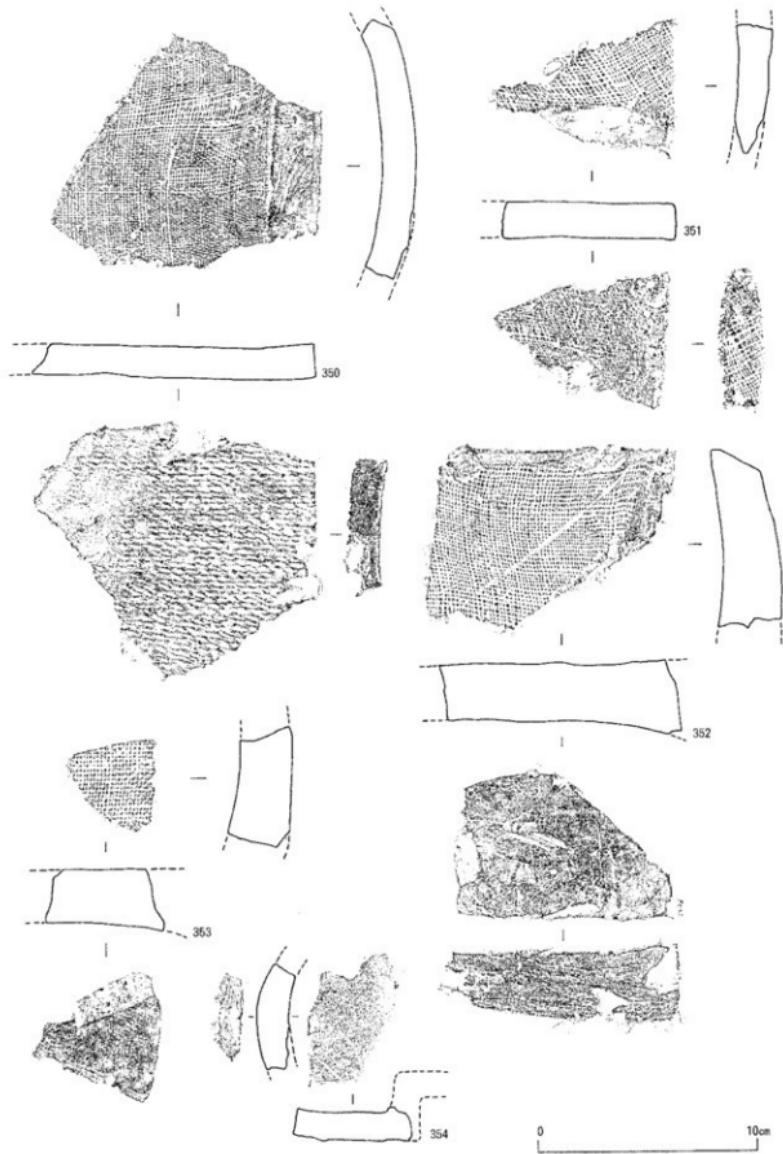
図番号	出土層位	器種名	凸 面	凹 面	色 調
338	第 3 層	平 瓦	縄目タタキ	布 日	暗灰色
339	第 3 層	平 瓦	布目	布 日	暗黄灰色
340	第 3 層	平 瓦	縄目タタキ	布 目	暗灰色
341	第 3 層	平 瓦	布目、ナデ	布 目	暗灰色
342	第 3 層	平 瓦	縄目タタキ	布 目	暗灰色
343	第 3 層	平 瓦	縄目タタキ	布 日	暗灰色
344	第 3 層	平 瓦	布目	布 日	暗灰色
345	第 3 層	平 瓦	縄目タタキ	布 日	黑色
346	第 3 層	平 瓦	縄目タタキ	布 日	淡黄灰色
347	第 3 層	平 瓦	ナデ	布 日	灰色
348	第 3 層	平 瓦	縄目(粗)タタキ	布 目	淡黄褐色
349	第 3 层	平 瓦	縄目タタキ	布 目	淡灰色
350	第 4 層	平 瓦	縄目タタキ	布 目	暗灰色
351	第 4 層	平 瓦	布目	布 目	暗灰黄色
352	第 4 层	軒平瓦	ナデ	布 目	灰色
353	第 4 层	平 瓦	ナデ	布 目	暗灰色
354	第 4 层	丸 瓦	ナデ	ナ デ	黑色
355	第 4 层	平 瓦	布目	布 目	灰色
356	第 4 层	平 瓦	布目	布 目	暗灰色
357	第 4 层	平 瓦	布目	布 目	暗灰色
358	第 4 层	平 瓦	縄目タタキ	布 目	暗灰色
359	第 4 层	平 瓦	縄目タタキ	布 目	淡灰色
360	第 4 层	平 瓦	縄目(粗)タタキ	布 日	灰色
361	第 4 层	平 瓦	布目、ナデ	布 日	暗灰色
362	第 4 层	丸 瓦	ナデ	布目、ナデ	黑色
363	第 4 层	平 瓦	縄目タタキ	布 日	淡灰白色
364	第 4 层	平 瓦	縄目(粗)タタキ	布 日	淡灰色
365	第 4 层	平 瓦	縄目タタキ	布 日	暗灰色
366	第 4 层	平 瓦	布目、ナデ	布 目	暗灰色
367	第 4 层	平 瓦	縄目タタキ	布 目	淡黄褐色
368	第 4 层	平 瓦	縄目タタキ	はなれ砂	淡灰白色
369	第5層上面	平 瓦	縄目タタキ	布 日	暗灰色
370	第5層上面	平 瓦	縄目(粗)タタキ	布 日	暗灰色
371	第 4 层	平 瓦	縄目(粗)タタキ	布 日	暗黄褐色
372	第5層上面	平 瓦	縄目タタキ、ユビオサエ	布 日	淡灰色
373	第5層上面	平 瓦	縄目(粗)タタキ	布 日	灰 黑色



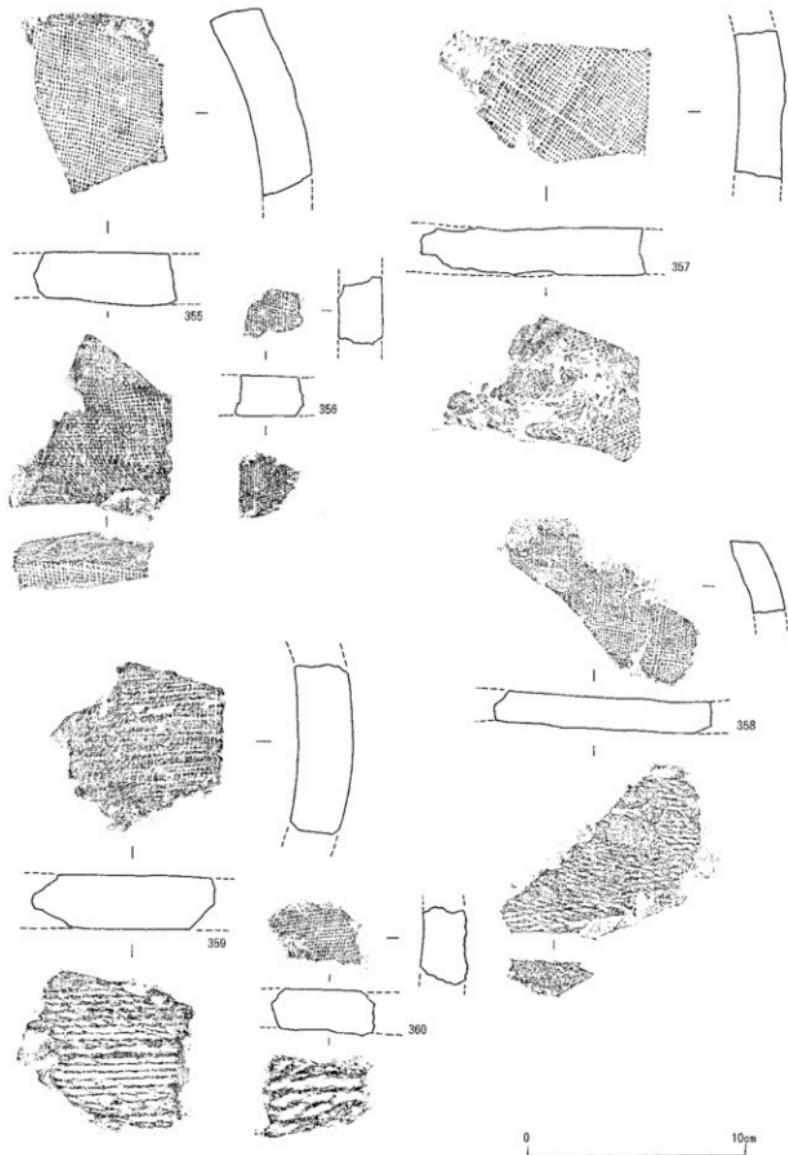
第29図 出土瓦拓影・実測図(1)



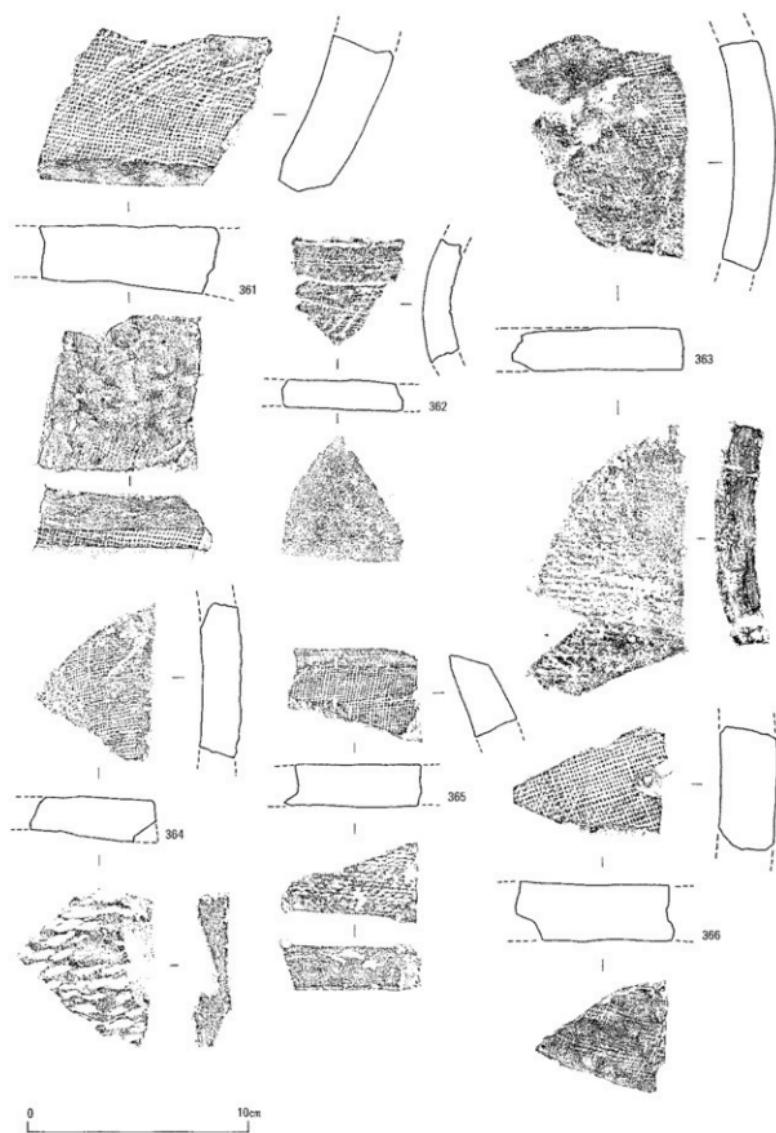
第30図 出土瓦拓影・実測図（2）



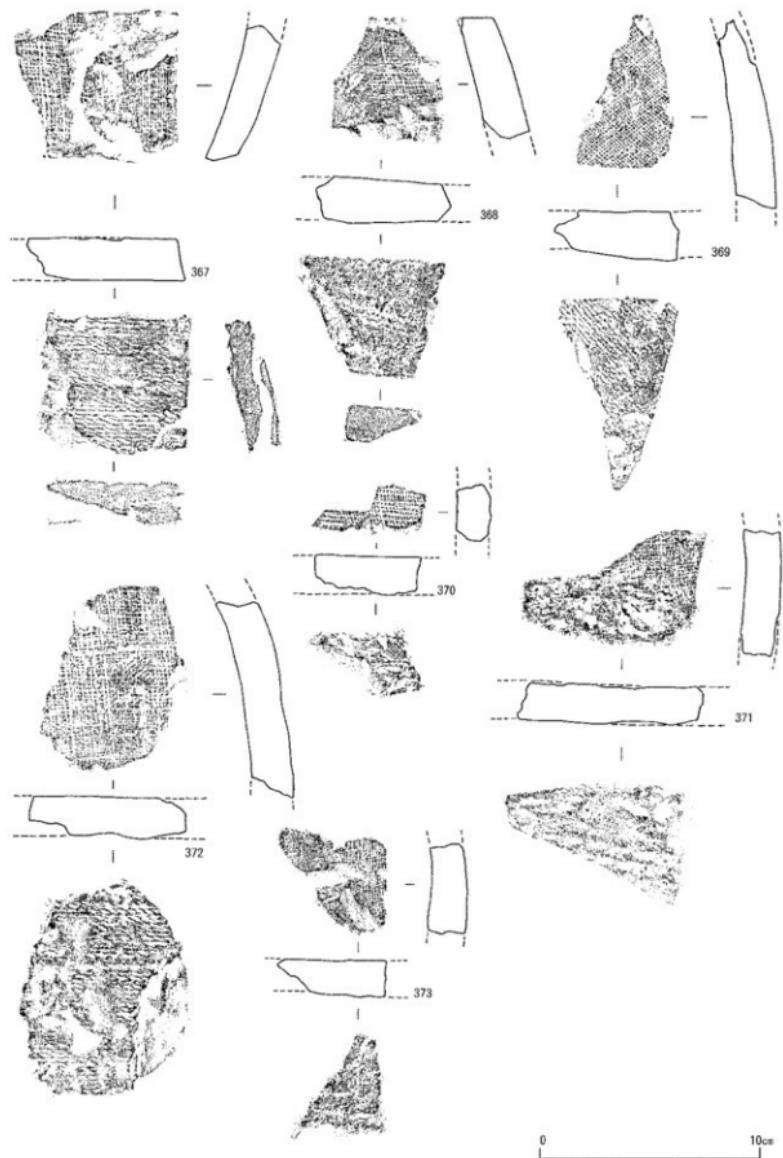
第31圖 出土瓦拓影・実測図（3）



第32圖 出土瓦拓影・実測図(4)



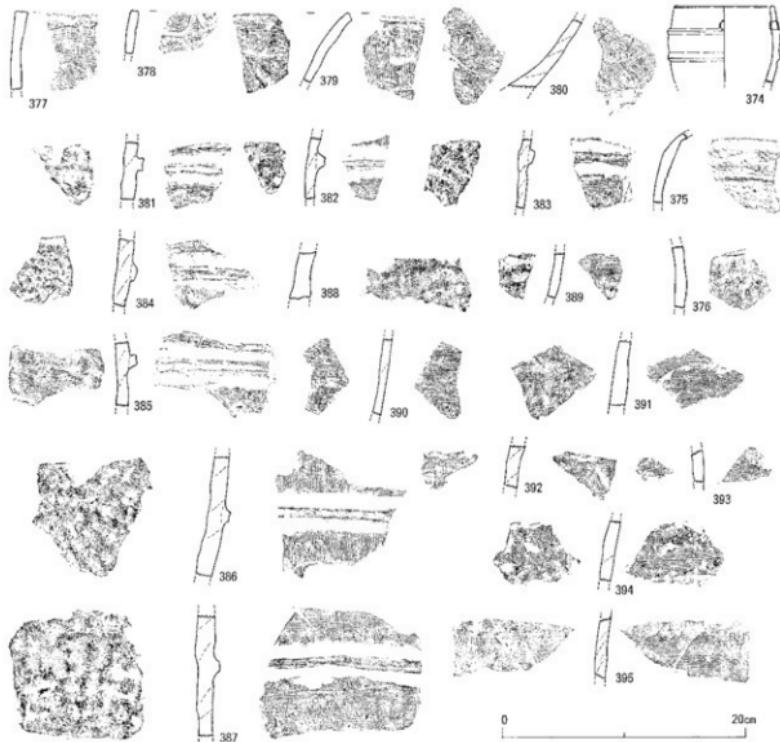
第33図 出土瓦拓影・実測図(5)



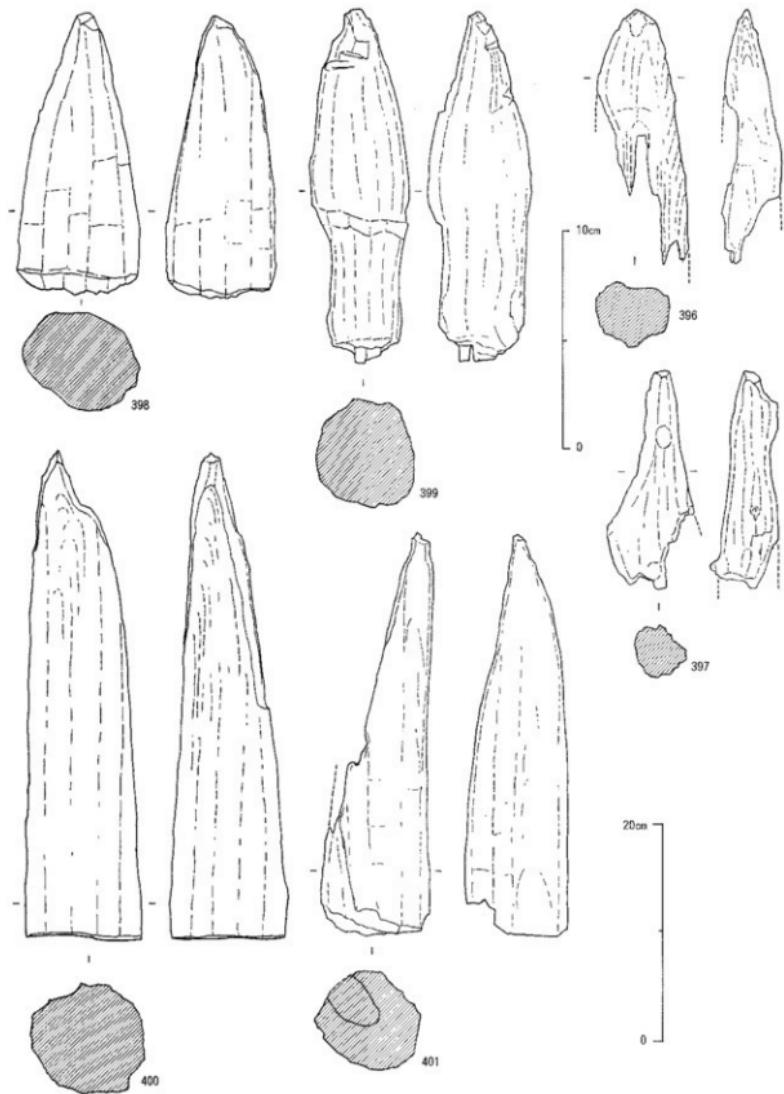
第34図 山土瓦拓影・実測図(6)

3) 墓輪・古墳時代須恵器(第35図) 374～376は古墳時代の須恵器で374は把手付鉢、375は甕。374はSP200、375はSP313、376は第4層各出土。377～395は円筒埴輪。383は外面タテハケ後ヨコハケ(8条/cm)、内面ナデ。淡赤褐色。384は外面上部ヨコハケ(8条/cm)、下部タテハケ(6条/cm)、内面上部ヨコハケ(8条/cm)、下部ナデ。浅いタガを1条廻らす。386は外面タテハケ(7条/cm)、内面ヨコハケ(8条/cm)、ヨコナデで低いタガを1条廻らす。淡黄橙色。387は外面B種ヨコハケ(8条/cm)、内面ナデ・ユビオサエ。ヨコナデで低いタガを1条廻らす。淡黄褐色。392は外面タテハケ後B種ヨコハケ(8条/cm)、内面ヨコハケ(8条/cm)。淡赤褐色。377はSX201、379はSD126、381はSP241、382はSP259、383・384・390はSK101、385はSP314、391はSP304、393はSP329、395はSP314、378は第3層、380・386～388は第4層、389・394は第5層上面各出土。

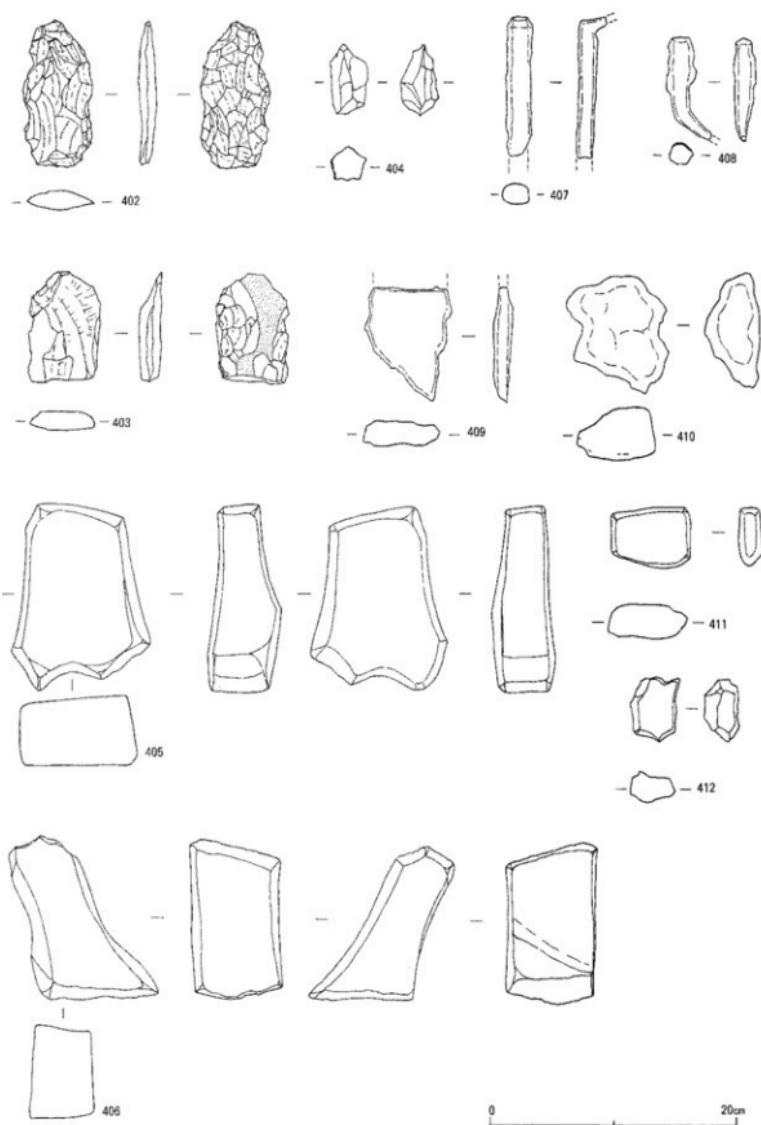
4) その他の遺物(第36・37図) 396～401は建物6の柱材。全て広葉樹である。402は両面加工石器、第4層出土。403は楔形石器、第3層。404は火打石、第2B層。405・406は砥石、ともに第4層。407・408は鉄釘、407はSK101、408は第5層上面。409～412は鉄製品、409・411は第4層、410はSP251、412はSP230各出土。



第35図 墓輪・古墳時代須恵器実測図



第36図 建物 6 他柱材実測図



第37図 石器・石製品・鉄製品実測図

## VI 調査成果と課題

今回の調査は善根寺遺跡の第1次調査にあたり、既往の調査成果の蓄積がなく、いわば手探りの中から出発した。しかしながら既述のように奈良～平安時代の掘立柱建物を6棟検出するなど大きな成果を得た。ここでは遺構・遺物の検討から善根寺遺跡の様相を描記し、そこから敷衍する集落実態について文献史料を参照しながら探っていきたい。なお、以下掘立柱建物は「建物」と略記する。

### 1) 遺構・遺物の検討

まず出土土器の年代観からみた奈良～平安時代の遺構の変遷について略述する。遺物包含層である第4層出土土師器をみると、(i)平城宮Ⅲを中心とした時期〔I期〕、(ii)平城宮Ⅵの時期〔II期〕、(iii)平安時代前期～中期〔III期〕の3時期に大別できる。これを踏まえて各建物出土土器をみると、建物2から、ての字状口縁をもつ土師器皿(26・27)や灰釉陶器甕(7)が出土し、I期・II期とは隔絶したIII期に該当する。いっぽう、建物6は大型の柱掘形を持つのに反して出土遺物は僅少であるが、肩部で大きく屈曲する須恵器壺C(25)が出土している。建物廃絶後の遺構SK101・SX202の年代観を考え併せるとI期に措定できる。建物5出土土器は図示できなかつたものの、I期に属する遺物があり該期の所産と考えている。建物1出土土器は他に比して多い。平城宮Ⅲに属する須恵器環C(6)がみられるが、概して須恵器環Bの体部の開きは直立気味で高台も垂下することから、II期と推定できる。建物4も同様の年代観からII期とした。土坑はSK102出土土器がI期に相当する。SK101は遺構の規模から長期間の使用を想定しがたい。I期の遺構を破壊したため該期の遺物を相当量含むと捉えられる。製塩土器に時期差・形態差がみられるのはその傍証となりえよう。

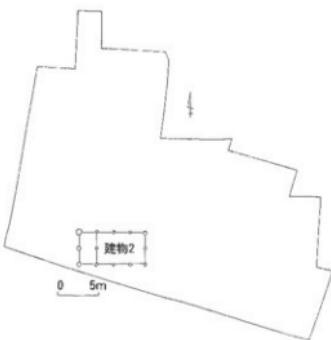
これらの遺構の変遷を第38図に示した。I期に調査地西側から建物の営造が開始される。II期は検出遺構の中心となる時期で主要家屋の建物1・建物3が現出する。建物6麻柱列の東延長線上に建物1の南面柱通りが一致することは、埋没した自然河川の影響をうけ建物を放擲し東へ移動したことを示唆す



I期（奈良時代中期）



II期（奈良時代末期）



III期（平安時代前期～中期）

第38図 遺構の変遷

る。またSK101はこの想定からⅠ期遺構に関わる廃棄土坑の性格をもつことが窺われる。Ⅲ期は今回検出した集落の衰退時期にあたる。該当する家屋は建物2のみで建物に伴う遺構も不明である。鎌倉時代以降、調査地は耕作地となり、集落は再び営まれることなく現代に至っている。

次に東大阪市域で他の奈良～平安時代前期集落と比較してみたい。福永信雄作成にかかる一覧表<sup>(1)</sup>に掲げば、1999年時点で市内に点在する該期集落は23ヶ所を数える。このうち掘立柱建物が検出されているのは、芝ヶ丘・植附・神並・鬼塚・皿池・西岩田・瓜生堂の7遺跡であるが、実態が判明しているのはごく数例に過ぎない。善根寺遺跡の南方約2kmに所在する神並遺跡の第6次調査(KUM59-5区)<sup>(2)</sup>では、倉庫2棟を含む掘立柱建物6棟・井戸1基が検出された。掘立柱建物の中には一辺0.8mで方形の柱断面をもつものがみられた。井戸からは「長福」「池」などの銘をもつ墨書き土器4点のほか、土師器や須恵器が出土している<sup>(3)</sup>。これらは平城宮V～VIに属する。報告者も井戸の埋没時期を奈良時代末期とする。のことから同一遺構面の掘立柱建物の下限を該期に求めることができ善根寺遺跡と同時期となる。神並遺跡の場合、掘立柱建物の床面積は最大でも約20m<sup>2</sup>で、善根寺遺跡例の平均35.7m<sup>2</sup>には遠く及ばない。建物規模の大きな差違から、善根寺遺跡を一般集落とは捉えがたい。さらに各建物の南北軸は全て真北(座標北)を向き、集落の營造にあたって強い規格性・計画性を窺うことができる。かつて閑和彥氏は①整然とした企画性のある掘立柱建物、②円面鏡・転用鏡の出土、③「館」「家」「郷長」などの墨書き土器・木簡の出土、を指標としてこれらのいずれかが該当する場合、地方末端支配機構としての「郷衙」の可能性を指摘した<sup>(4)</sup>。善根寺遺跡については指標の①と②が相当し郷衙の蓋然性は高いと考えられよう。では本遺跡は河内国河内郡にあってどの郷に該当するのであろうか。次に文献史料を用いてこの問題を探ってみたい。

## 2) 文献史料からみた善根寺遺跡

善根寺町は江戸時代善根寺村と称したが、日下村の枝郷で寛文3年(1664)に分村している<sup>(5)</sup>。分村前の日下村は現在の日下町・善根寺町・布市町を包摂し東大阪市の前身、枚岡市に合併する前の孔舎衙村にはほぼ相当する。『和名類聚抄』巻第六には、河内国河内郡の郷に「英多 新居 桜井 大宅 豊浦 須田 大戸」と載せ、郷名の配列順序から大戸郷に該当することになる。ところが『教王護国寺文書』第一所載の「河内国石凝寺々地等免判抄」に大戸郷とともに早<sup>(6)</sup>郷が見えることから、文書の紀年承保元年(1081)の頃には大戸郷<sup>(7)</sup>から北の地域が分郷していることが知られる。このことに関連するのが『新撰姓氏録』河内国皇別の大戸首条で、

阿閉朝臣同祖。大彦命男比毛由比命後也。溢安閑御世。河内国日下大戸村造立御宅。為首仕奉行。

仍賜大戸首姓。日本紀綱。(傍点筆者。以下同じ。)

とみえる。安閑朝、当地に屯倉が設置されていたかどうかはさておき、「日下大戸村」の表記から複合地名の呼称が知られる。善根寺遺跡のサト<sup>(8)</sup>名称として、「大戸サト→日下大戸サト→日下サト」の進展が推定される。藤原宮第29次調査6AJB-Q区東面大垣地区外濠SD170出土木簡<sup>(9)</sup>に、

QK29 032 日下里人戸首末呂戸諸方萬一枚

と記載のある貢物荷札が出土している。外濠SD170伴出の木簡で年紀をもつものからこの外濠は7世紀末から8世紀のごく初頭にかけて機能していたことが知られる<sup>(10)</sup>。加藤氏は日下里を河内国と判断されている。すると大戸サトの名を負う大戸首が居住する一方で、8世紀の段階から日下サトの呼称が広がっていたことが類推される。このことは、善根寺遺跡の奈良時代集落が8世紀中葉に營造を開始することと符合する。かつて宮本長二郎氏は奈良時代後半以降の時期に、急速に開拓が進展した契機となったのは、天平15年(743)の「墾田永世私財法」であることを説かれた<sup>(11)</sup>が、まさに善根寺遺跡例はそれに合致し、奈良時代の新立のサトとして現出することが窺われる。

次に、日下サトに居住した氏族について考えてみたい。サト名を負う日下・日下部の諸氏族および前記の大戸首ほかで、『新撰姓氏録』の河内国に編列されるものを摘記すると次のとおりとなる。

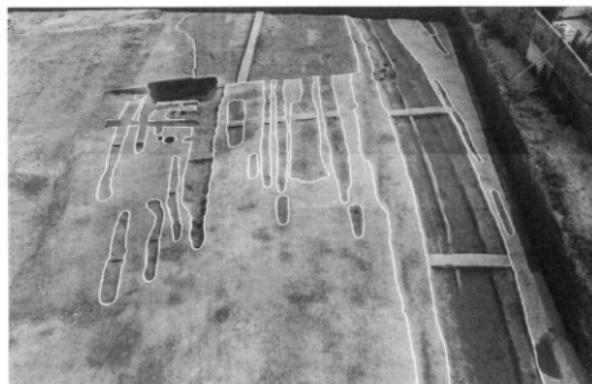
種別	先祖名	次祖名	姓氏名	出典箇所	備考
I 開化天皇 →彦坐命	狹穂彦命		日下部連	河内国皇別	
			日下部	河内国皇別	
			酒人造	河内国皇別	日下部連同祖
II 大彦命	紐結命		日下部	河内国皇別	阿閉朝臣同祖
			大戸首	河内国皇別	阿閉朝臣同祖
III 神饒速日命	比古由支命		日下部	河内国皇別	

I の酒人造は『河内国大税負死亡人帳』(『大口本古文書』24巻59頁)に、「戸主牛鹿部縣戸口下姉女年伍拾肆 稅參拾束(中略) 同戸酒人袁爾壳年式拾 稅參拾束(後略)」とあり、同祖関係を保ちつつ編戸されたことが推定されるため表に掲出した。III の日下部で先祖の神饒速日命は大戸サトの式内社石切御箭命神社の祭神であり、日下サトに居住の蓋然性は高い。II の日下連は大戸首と同祖関係にあり、もと(大)草香部(草壁)吉士で『日本書紀』天武十二年十月己未条に三宅吉士ほかとともに迎を賜姓されている<sup>(12)</sup>。加藤氏によれば、草壁吉士は大戸首とともに難波吉士の系統に属し、敏達朝から推古朝をピークとして王權の渉外活動を担当していたとされる。草香部吉士の外交活動の背景として、日下サトが「草香江」に面し、「草香津」「口下直越」<sup>(13)</sup>など海運・陸運の要衝であることは論を俟たない。加藤氏は草香部吉士が日下に活動の拠点を有していたことを推定されている。なお、他の吉士系諸氏と同じく、草香部吉士も渡来系の氏族で後代に皇別を仮冒するに至っている。昌泰三年(900)八月廿日『河内国河内郡土地売券』(『平安遺文』補遺編所収)には、専売「正六位上日下部秀貞」、知事「從七位上日下部秀道」、四至保証刀禰の一人に「正七位上日下部益藏」らが名を連ねる。「從八位上良枝宿禰有実」の良枝宿禰はもと大戸首で承和元年(834)に賜姓された<sup>(14)</sup>。断簡であるが、日下部氏が先主であり河内郡印が捺されることから、日下サトの実態に関わる好史料といえよう。

- (1) 福永信雄「東大阪市域の奈良・平安時代前期の遺跡について」((財)東大阪市文化財協会『鬼塚遺跡第13次(遺物編)15次発掘調査報告書』、1999年。)
- (2) 大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査報告書』、1986年。
- (3) 註(2)文獻の土器実測図をみると、土師器塊A・塊C・壺A・壺B・須恵器坏B・坏B蓋・壺蓋・壺L・平瓶(器種・器形の名称は報告書記載に拠らず『平城宮発掘調査報告』に準拠した)が提出されている。
- (4) 関和彦「古代村落「官衙」研究の提言」『共立女子第二中学高等学校研究論集』12、1989年。
- (5) 「善根寺村」(『大阪府の地名』)、1986年、950頁)
- (6) 通説で「日下」の誤記とされている。
- (7) 現在の東石切町・西石切町・北石切町・上石切町各町に該当するとされている。
- (8) 以下、煩雜さをさけるため、都より下位の地方末端組織をサトと仮称し、国郡里制下の里、国郡郷里制下の郷、国郡郷制下の郷を内包するものとして論を進める。
- (9) 加藤 優「奈良・藤原宮跡」(『木簡研究』3、1981年。) 奈良国立文化財研究所『藤原宮出土木簡(五)』、1981年。
- (10) 着9文献および奈良県立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』、1981年。を参照のこと。
- (11) 宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」、1996年、402頁。
- (12) 以下、吉士の記述については加藤講吉「吉士と西漢氏」、2001年。に扱っている。なおクサカベ吉士は草香部吉士と表記する。
- (13) これらの地名が『日本書紀』神武即位前紀などに頻出することは既に知られているが、この項では奈良期の反映とみており、敢えて傍證に加えていない。
- (14) 『統日本後紀』承和元年十二月乙未条。



調査前の状況  
(北西より)



中世～近世期の  
遺構掘削後状況  
(北より)



SX 2 内壁  
出土状況



奈良～平安時代遺構  
検出状況（北より）



奈良～平安時代遺構  
全景（北より）



奈良～平安時代遺構  
全景（東より）



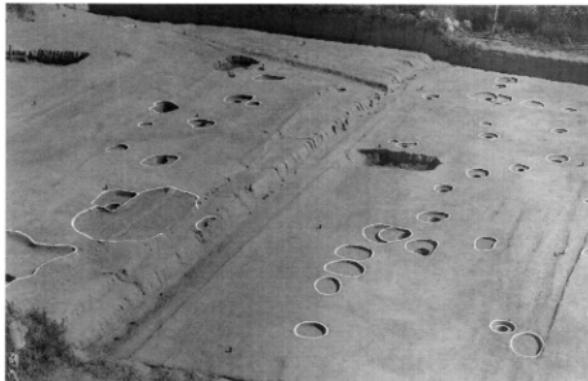
建物1検出状況  
(北より)



建物1掘削後状況  
(北より)



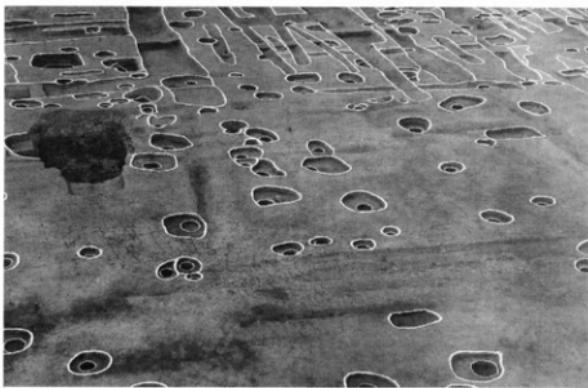
建物2掘削後状況  
(西より)



建物3検出状況  
(北より)



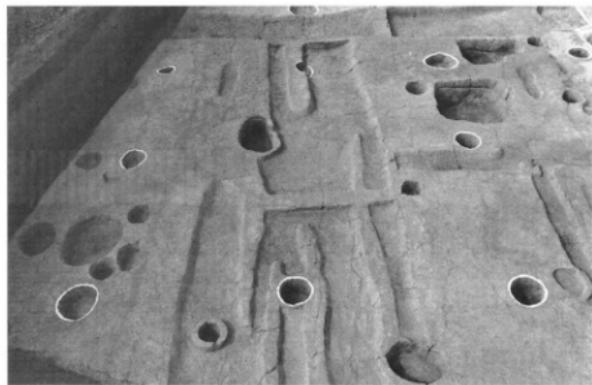
建物3検出状況  
(南より)



建物4及び周辺の遺構  
(東より)



建物4掘削後状況  
(東より)



建物5掘削後状況  
(南より)



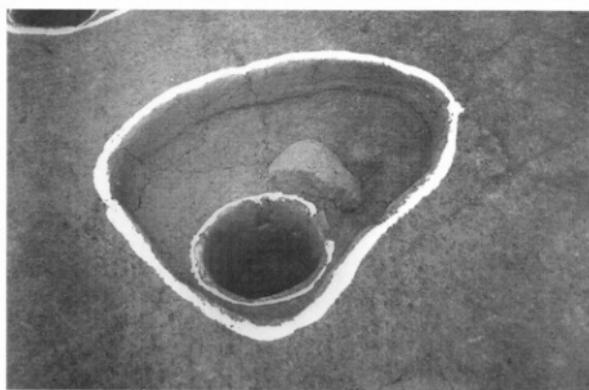
建物6掘削後状況  
(北より)



建物6 (SP329)  
柱痕出土状況



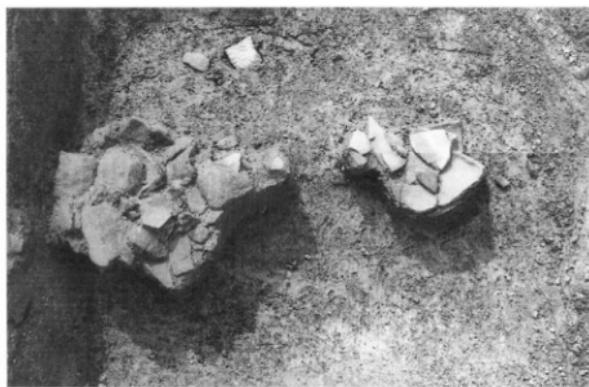
建物2 (SP140)  
根支え石出土状況



建物4 (SP312)  
根支え石出土状況



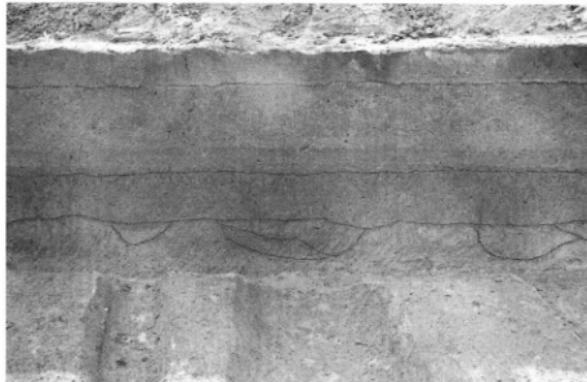
SK101 土師器・須恵器  
出土状況



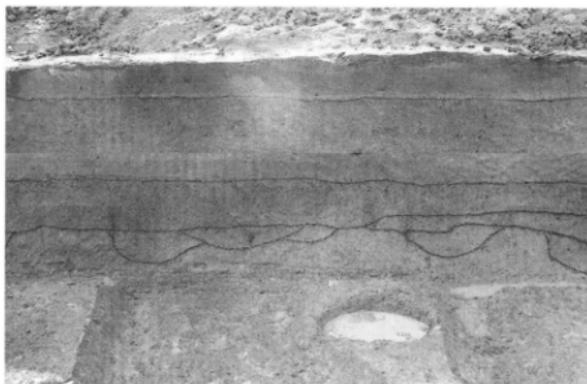
SK101 製塙土器  
出土状況



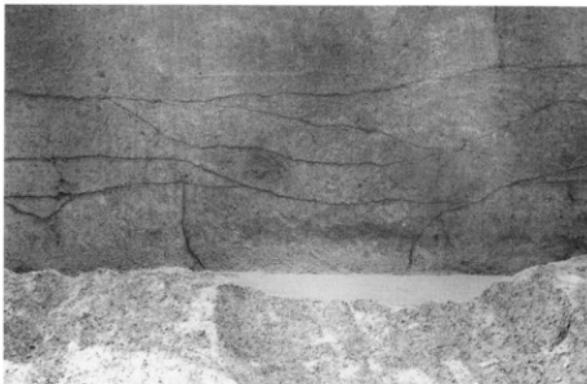
SK102 遺物出土状況



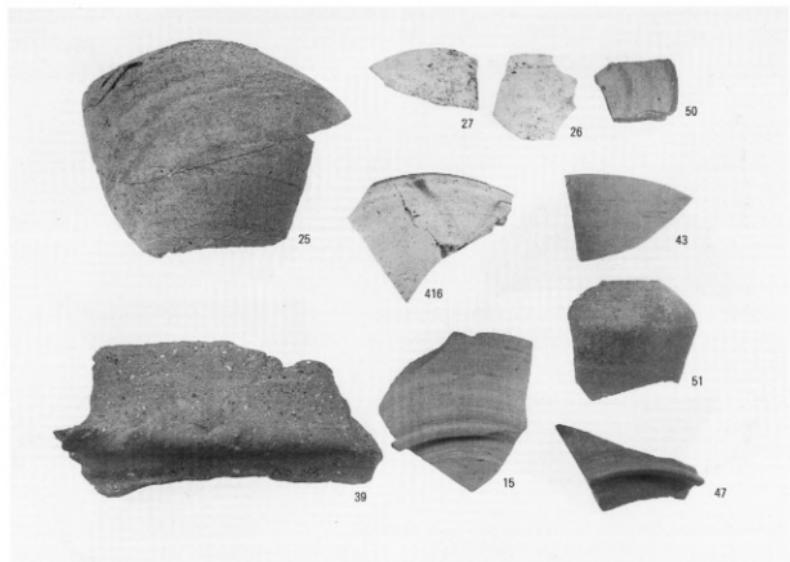
西壁斷面



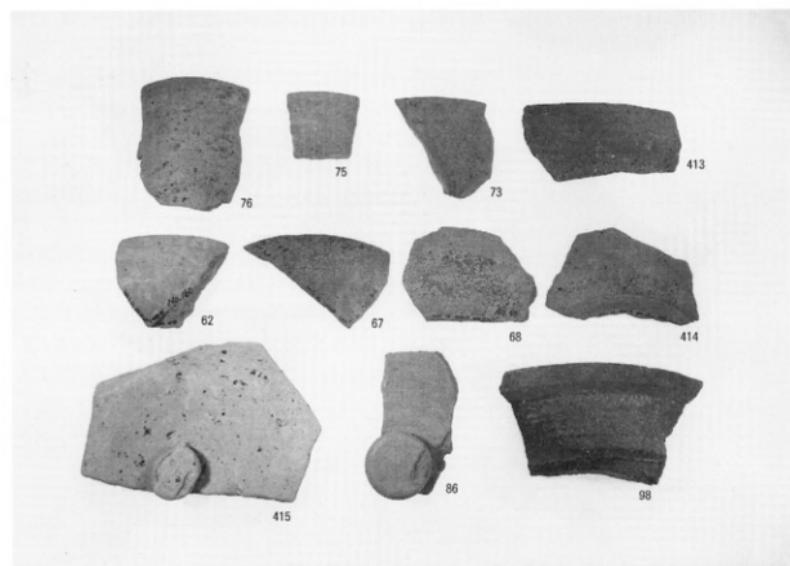
西壁斷面



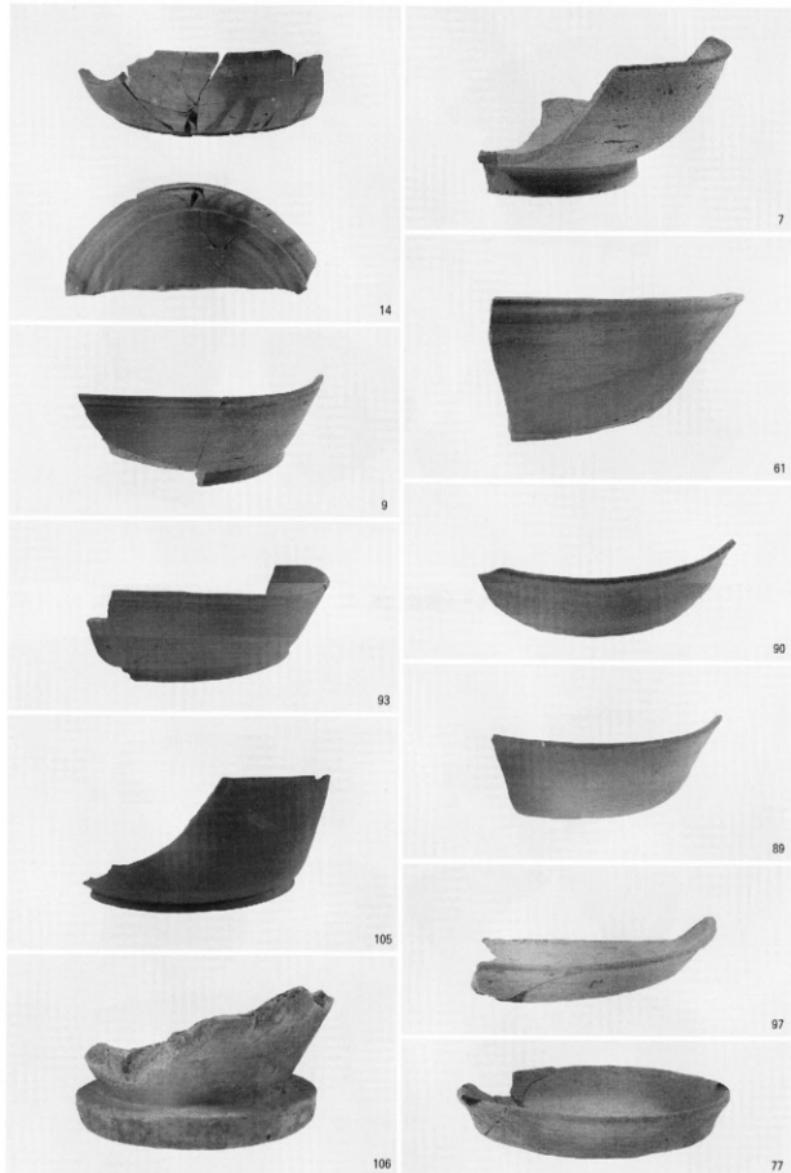
西壁斷面近景



各柱穴出土土師器 (26、27、39) 須惠器 (25、43、47、50、51、416)

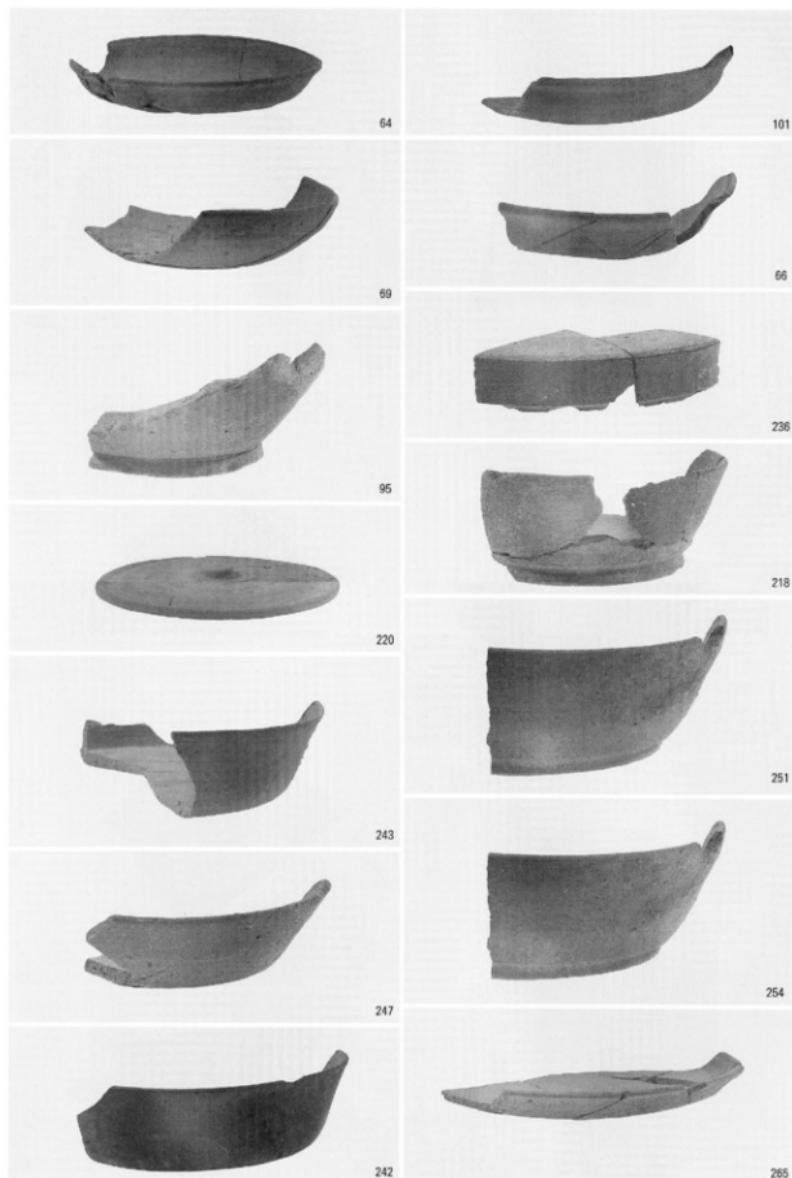


SK101出土土師器 (62、67、68、73、75、76、413、414) 須惠器 (86、98、415)

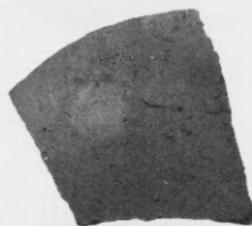


各柱穴出土須恵器（9、14）山茶碗（7） SK101出土土師器（77）

須恵器（89、90） SK102出土須恵器（105、106） SK135出土須恵器（61）



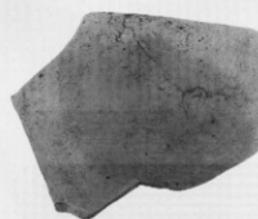
SK101出土土師器（64、66） 須恵器（95） 第4層出土須恵器（218、220、  
236、242、243、247、251、254、265） SK102出土土師器（69、101）



238



354



237



145



79

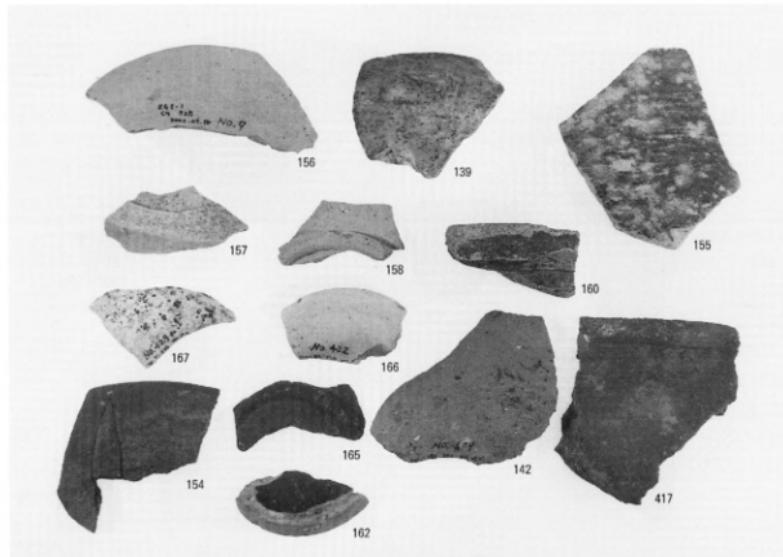


163

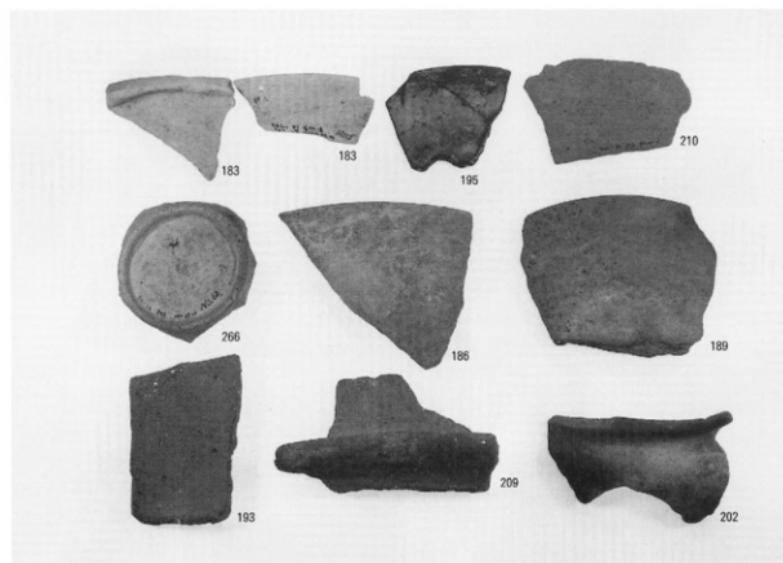


271

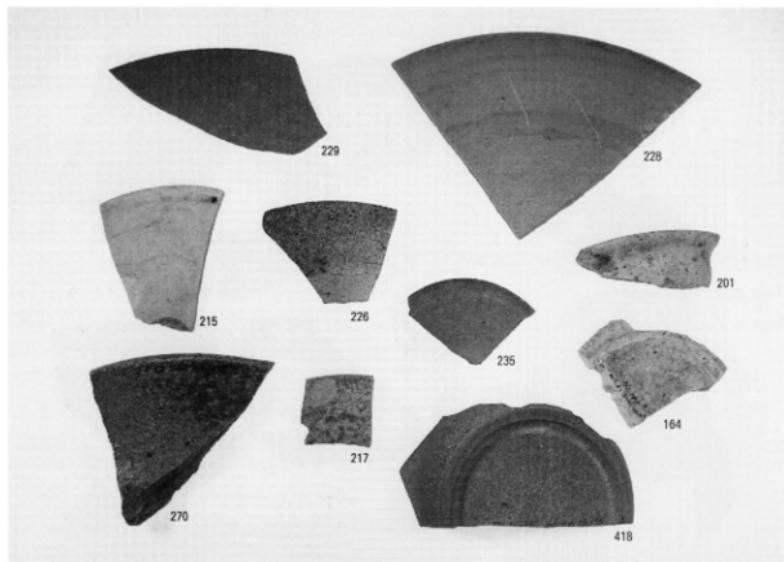
SK101出土土師器（79） 第4層出土須恵器甕（271） 墨書き器（238） 転用硯（237）  
中近世遺構出土山茶碗（145） 第3層出土綠釉陶器（163） 古墳時代須恵器（354）



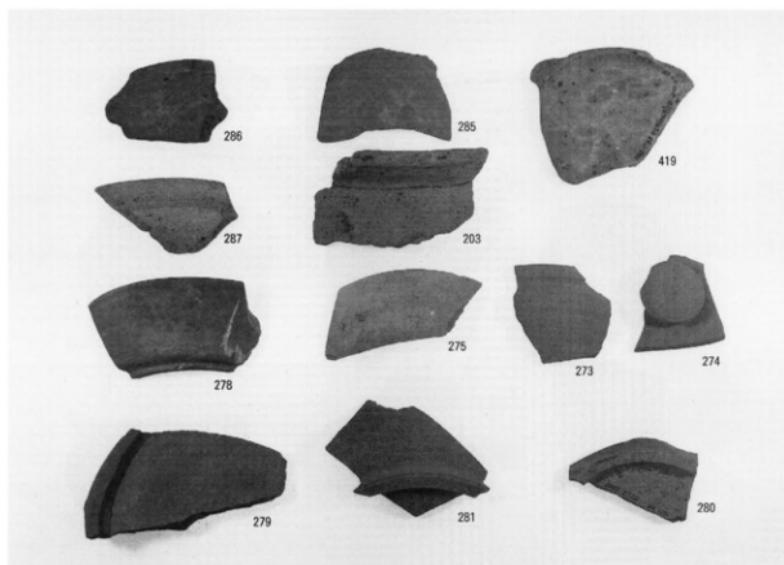
中近世遺構・第3層出土 土師器（166、167）須恵器（142、158、162）  
灰釉陶器（157） 黒色土器（154、165） 瓦器（139、155、156） 常滑焼（160、410）



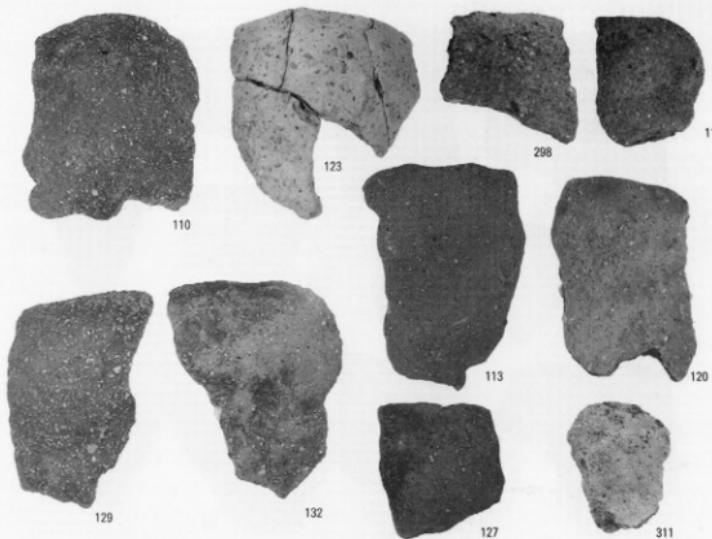
第4層出土土師器（183、186、189、193、195、202、209、210、266）



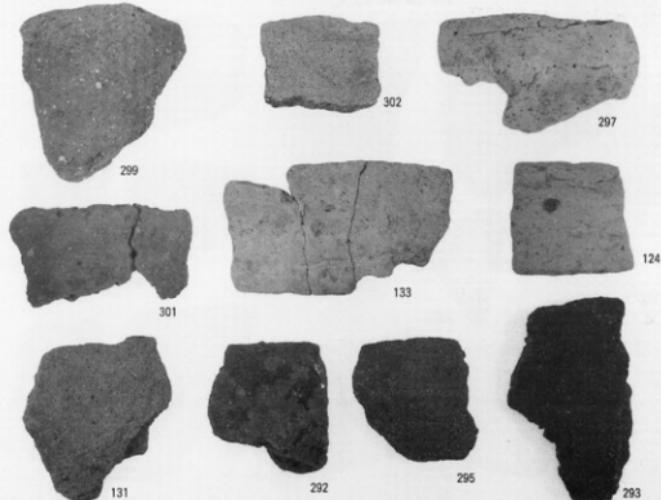
第4層出土須恵器（201、215、226、228、229、270、418）灰釉陶器（217）白磁（164）



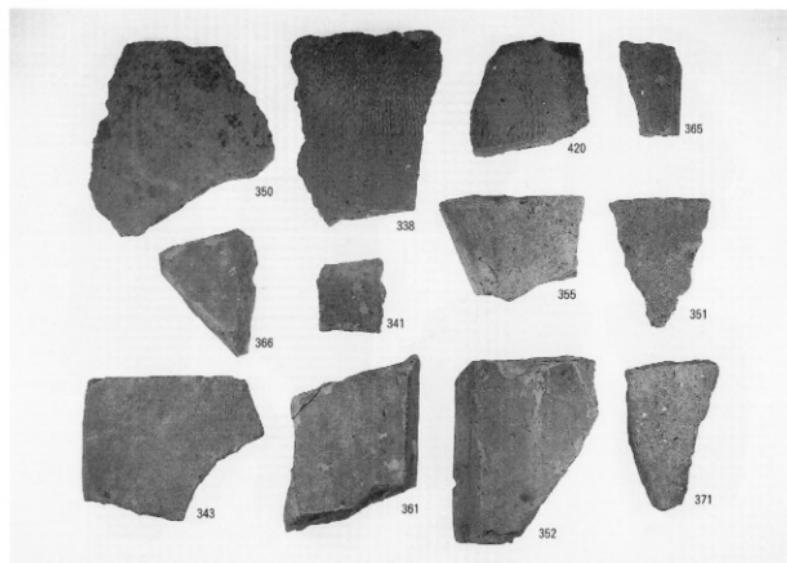
第5層出土土師器（285、286、203、287、419）須恵器（273～275、278～281）



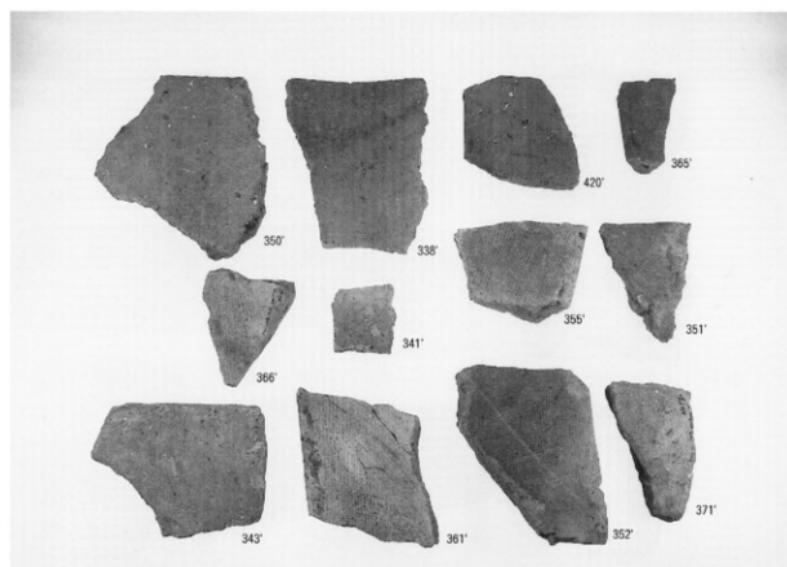
SK101出土製塙土器（110、113、114、120、123、127、129、132）第4層出土製塙土器（298、311）



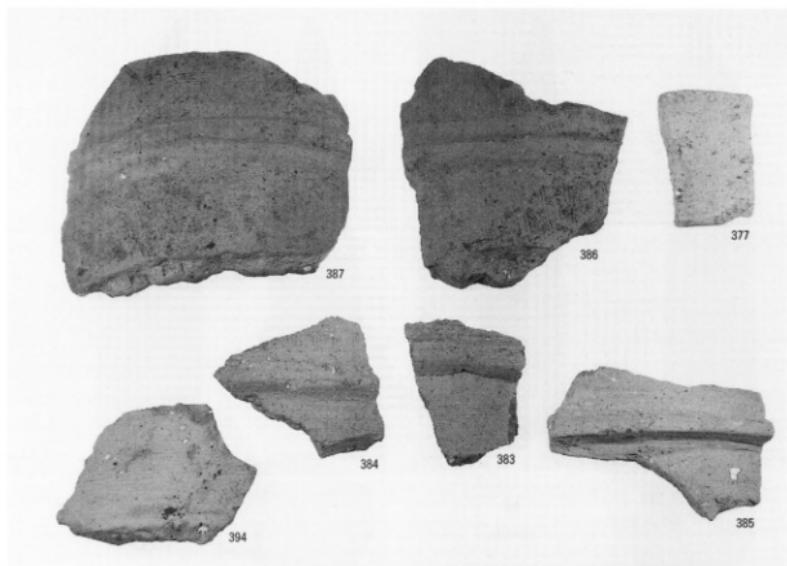
各遺構 第4・5層出土製塙土器（124、131、133、292、293、295、297、299、301、302）



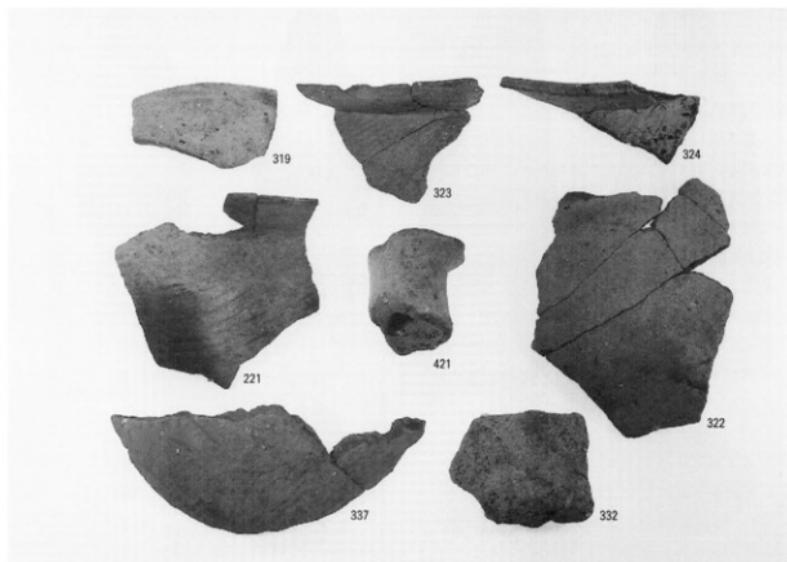
第3～5層出土平瓦（338、341、343、350～352、355、361、365、366、371、420）



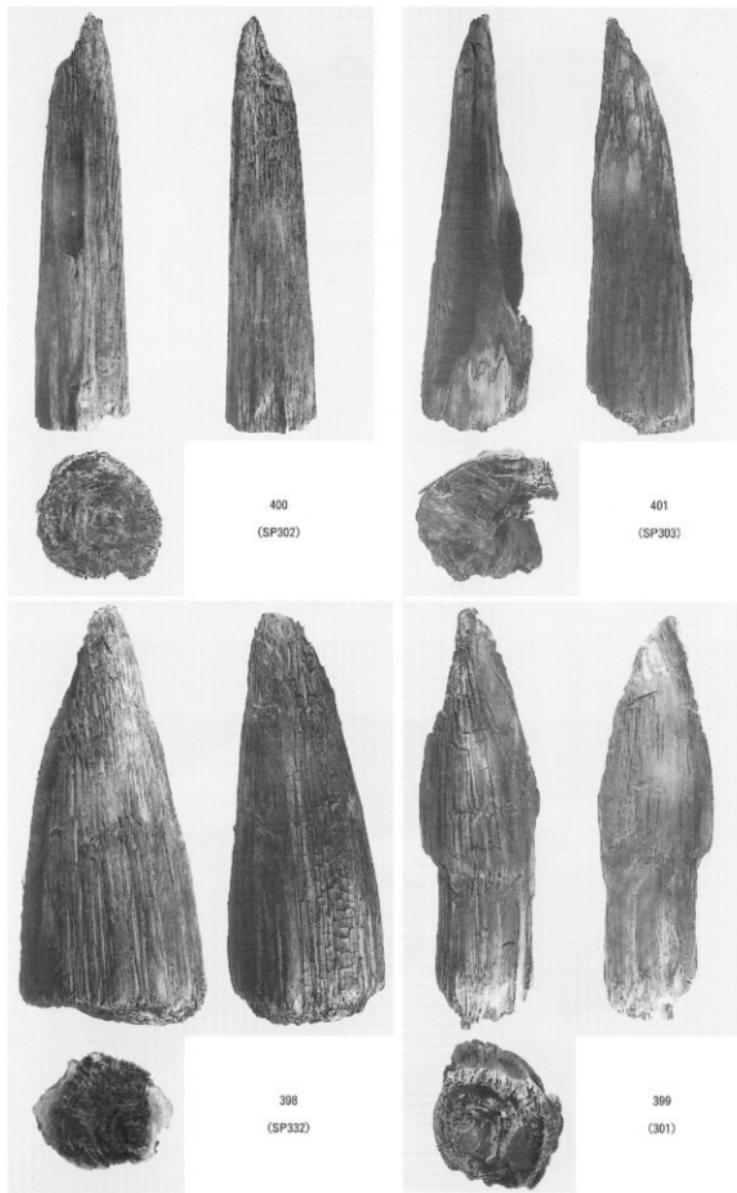
第3～5層出土平瓦（338'、341'、343'、350'～352'、355'、361'、365'、366'、371'、420'）



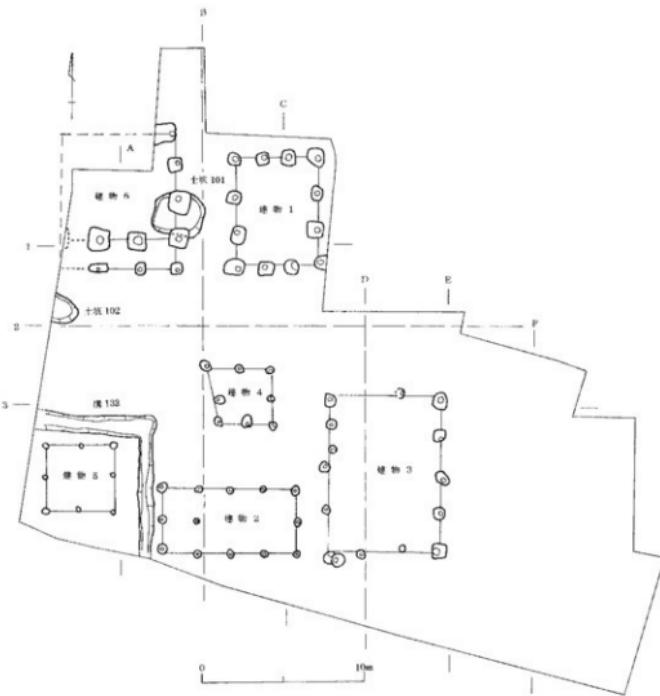
各構造・各層出土 円筒埴輪（377、383～387、394）



各構造・各層出土 弥生土器 壺（319、321～324、332、337）高杯（421）



据立柱建物 6 他 柱材 (398~401)



▲据立柱建物 平面図

## 報告書抄録

ふりがな	ろうじんほーむけんせつにともなう ゼンゴンジイセキダイ1 じはっくつ ちょうさがいようほうこく					
書名	老人ホーム建設に伴う善根寺遺跡第1次発掘調査概要報告					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編集者名	菅原章太					
所在地	〒577-0011 東大阪市荒本北50番地の4					
発行年月日	2003年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査面積	調査原因
ぜんごんじいせき 善根寺遺跡	東大阪市善根寺町 1丁目636-1番地  ほか4筆	27227	131	平成14年 6月17日 ～ 8月31日	約800m <sup>2</sup>	老人ホーム 建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落跡地 散布	弥生時代 ～ 江戸時代	掘立柱建物・ビックト・溝・土坑・落ち込み		土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・貨銭・埴輪・弥生土器・石器	掘立柱建物6棟を 検出うち1棟には 柱材が遺存	

**老人ホーム建設に伴う  
善根寺遺跡第1次発掘調査概要報告**

発行日 平成15年3月31日

発行所 東大阪市教育委員会

〒577-0011

東大阪市荒本北50番地の4

印刷所 (株)ソーエイ

〒673-0898

明石市樽屋町6-6

電話 078-911-2918

